



流れ星やの
ミチル

大切な人

この物語を、あの頃、とても大切だった、
そして今もとても大切な、
かつの みちこ に捧げる。

トタン屋根

——流れ星が流れている間に願い事を三回唱えると”ささやかな”願いが叶います。

丸くて特徴のある文字でそう書かれた看板がこの街の片隅にかかげられて、一年になる。

看板はトタン屋根の小屋にあり、トタン屋根は緑色の目立つ色をしている。

小屋は道路の脇の歩道に、いまはすっかり見かけなくなった公衆電話ボックスのように四角く細長く、電信柱に寄り添うように建っている。

この小屋が街で有名な「流れ星やさん」である。

トタンでぐるりを囲んでおり、ツタやよくわからない植物が小屋に巻き付いたり、いろいろなペンキでカラフルに落書きがされており、四方のどれも元の緑色をのぞかせている部分はすくない。また、トタン屋根の小屋の正面にはちょっとくすんだ白ペンキでわざと雑に塗った壁のカフェがある。カフェの入り口のとなりに窓があり、そこが流れ星やさんの受付であるらしい。

「星差し指」というおかしな名前だ。白い扉はアンティークのものらしく、ところどころほころんでいて、ちょっと危なっかしい。扉の上に星差し指が天にむかってなにかを示しているイラストとともに屋号が連なっている。

さて、話を小屋の方にもどそう。

流れ星を流すことがこの小屋の役目である。

そう聞くとなんだか釈然としない。小屋のどこにそんな力があるのだろうか。どこかしらヒッピーが寄り付きそうなジャンキーな印象だし、こんな狭い、人がふたり入れれば満員になるであろう建物に。

しかし、連日、”ささやかな”願いを叶えたいという客が「流れ星やさん」に集まり、列を連ねる。

この、ささやかな、というところが大事で、どこからどこまでがささやかなのか、その判断が難しい。

——みんなが安全に生きていけますように。

——歌手になれますように。

——目が見えるようになりますように。

——お金持ちになれますように。

ありとあらゆる願い事は、ささやかかそうでないかにわけることができる。上（縦書きの場合は右）の例はすべて”そうでない”願い事だ。

ここで願ったことは”ささやか”であれば叶う。そう噂されて、実際に何人かは願いが叶ったとあってカフェの受付に報告に来た事があるようだ。願い事が叶うとカフェの壁にとてもちいさな星のマークのシールを貼ることができる。一年間続けているだけで、壁は星で埋め尽くされた。白い壁に黄色いシールだったが今では一面が黄色くなってしまったので、シールの色を青に変えている。

”ささやか”な願いでなければ叶わない、という謳い文句の流れ星やさんにもいくつか”よこしまな”願いを持ってきた人もいた。そういう人は雰囲気わかる。たいていはサングラスをしてい

るか、ボーダーのシャツを着ているか、ヒゲをはやしているとますます怪しい。ボーダーのシャツというのは『よこしま』になっているからだ、と受付で流れ星を見る権利を与えられない。

カフェ「星差し指」は、流れ星やさんに先行して店を構えた。駅の地下工事がある程度めどがたったころのことだから、三年ほど前のことだ。はじめたばかりの頃は土地代が高く利益がでず、四苦八苦したと店主は語る。店主は絵に描いたような生真面目な人柄で、まがったことが嫌いなので「三角定規」とあだ名がついている。三角定規では呼ぶのに長過ぎるのでサンチョと呼ばれることも多いが、そもそもサンチョというのもなんとなくふざけた名前のような気がして店主はあまり気に入っていない。彼はぎょろっとした目で、やせぎすで、機嫌が悪いと相当な悪人面をしているが、基本的には笑顔を作り、冬の時期には口ひげを短く蓄える。異国で洋食のシェフを経験しているため、料理の手際は抜群によく、菓子も和菓子や洋菓子、なんでも作った。

サンチョはしばらく一人で切り盛りしていたが、あるときアルバイトを募集した。

冬の終わりの頃、この土地で珍しく雪がつもった日に面接にやってきた、丸坊主の若い男である。

サンチョは面接のときに何を思ったか、日本茶を丸坊主の彼にいれさせた。サンチョは真剣な顔つきである。寸分足りとも無駄な会話は許さない緊張した空気だったが、坊主の彼はどうしたものかと戸惑いながらもお茶をいれた。

——合格ですね。明日から働いてもらいましょう。

とサンチョは言った。湯のみには見事に茶柱がたっており、サンチョが求めていた人材とは、茶柱をいかにタイミング良く高確率でだせるかを理論や頭ではなく体でしっている者だった。

坊主の彼のあだ名は「茶柱名人」で、これも長過ぎる理由からチャメとなった。チャメは本当に茶柱をたてるのが本当にうまく、もちろん料理や接客もすばらしかった。

メニューはチャメの登場により、それまで洋風のものが多かったが、和風のものも出せるようになった。

豆腐をつくるときにでる大量のおからを豆腐工場から入荷し、ドーナツをつくっていた。棒状のドーナツもつくって、抹茶をまぶして「茶柱ドーナツ」というものもつくった。抹茶はキョートの宇治から仕入れている。

いちばんの人気メニューは、星型のロールケーキである。取り立ての卵とサトウキビからとれた極上の砂糖をつかった生地にホイップクリームを乗せて巻いたロールケーキに、火に通した包丁で均等に切ったものを鉄の星型で抜いたものだ。ベリー系のフルーツヨーグルトをかけることできあがり。

コーヒーは、赤いエスプレッソマシンがときどきしゅーっ、と音を立てて、濃いめのものが出る。

カフェの壁はまだ真っ白のままだった。

この街は都心と郊外の境界で、くねくねしたへび坂と行き止まりと猫がいる街だ。

メインストリートはもっとも狭く、車は通る事ができない。

うさぎ印の饅頭屋さん、靴屋さん、カレー屋さん、古着屋さん、串屋さん、八百屋さん、そういった昔ながらのお店を若い人が引き継いでいて、お客も若い人が中心だ。駅が地下に移動してからは目の前にビルができてしまい、陰でひっそりとしてしまったが、それでもメインストリートの座は譲っていない。

カフェ「星差し指」はメインストリートからずっと離れたところにある。中華料理やさんの跡地にできた。となりはクリーニング屋さんで、こちらのお店は老夫婦がずっとつづけている。若い世代で引き継ぐものがないらしいのだ。

チャメが何度目かのクリーニングを出しにとなりまでいったとき——コーヒの雫が水玉模様にはぽつぽつとこぼれた——忘れられない言葉をおじいさんが言った。

エプロンのシミをあちこちいろんな角度から眺めて、ふーむ、とうなってから、にこりと笑って、

「いい星座ができましたな」

と言った。チャメは苦笑いをしながらおじいさんのセンスに脱帽した。

「お店は順調かね？」

おじいさんは濡れたふきんで応急処置をしながら世間話をしようとチャメに話しかけた。

「ええ、まあ」チャメは丸坊主で人懐っこく見えるが、面識のない人にはからっきし弱く、返事がうまくできなかった。

「ふーむ。……よし、これでシミはとれそうだ」

「おじいさん、お名前はなんて言うのですか？」

チャメが何気なく訪ねるとおじいさんは突如目つきが陰しくなり握りこぶしをカウンターにどんツと音をたてて叩き付け、無礼者！ とわめいた。チャメは驚いて半歩だけ後ずさりした。クリーニングの機械がゆげをたてていて、それが店の前のつぎはぎ煙突に流れてゆき、ゆげは空気とおなじ、透明な色になった。

「名を聞くときは自分がまず名乗るのだ」

「すみません。……チャメといいます」

「そうだ、それでよい。わしは……そうさのう、ゆげじいだ」

おじいさんはさきほどまでの表情からうってかわって笑顔にもどった。

「ユゲジイ？」

「ああ、ゆげが出ている店にいるから、ゆげじいだ」

チャメは吹き出した。

「あの……星座だなんて、お洒落なことをおっしゃるんですね」

チャメがお世辞をいうと、ゆげじいはがははと大きな声で笑い、

「すべての言葉は詩でできているんだよ」と言った。

「……詩ですか？」

「服や布についた穢らわしい言葉たちをクリーニングして、詩的に仕上げる」

「あ、もしかして、お店の名前『マイセルフ』っていうのは……？」

「ふーむ。なかなかよく心得ておるな。私的……つまり詩的。ゆげが洗い流そうぞ。白いゆげで」

ゆげじいは笑うと、

「さ、しごとがあるから、もういったいった。新しい星座のことでも考えておきなさい」

チャメはカフェにもどった。もどってから思い出したが、お金を払っていなかった。つぎにテーブルクロスをクリーニングに出すときに払うことにしよう。

コリタス草はいい香り

チャメが休みの日、店主であるサンチョはついにヒゲを剃ってから出勤することにした。なぜなら昨日イチゴをスーパーで見つけてしまったからだ。ついに春が来た。サンチョはそれを確信した。

出勤して早々、彼は昨日買ったばかりのイチゴをムースにしようと考えた。フードプロセッサで細かく刻んでゼラチンや砂糖などを混ぜたもののなかに少しずつ加えていく。スピリータが入ったセランベリーという聞いた事もないような果実蒸留酒も手に入ったのでそこへ混ぜる。となりのゆげじいと言うには、スピリータは1969年以降手に入らないのだそうだ。とあるホテルで随分まえにジルという旅人が歌ってくれた歌にそんな歌詞があった。ホテルの名前は、忘れてしまったそうだ。

ムースは静かに冷蔵庫に眠ることになった。

それから店を開ける。今日は春らしいあたたかくなり始めた風がとても気持ちがよい。まだ青空はくすんだ冬の面影を残しているものの、芯までは寒くならない気温でそれを実感する。

昼過ぎに、ひときわ目を惹く客が現れた。ギターを背負っている女性だ。十代の後半らしく、肩まで伸びた黒髪とそばかすがかわいらしい、女性というより女の子が店に入ってきた。真っ黒いギターケースをテーブルの横に置くと、コーヒーだけを頼んでじっと待っていた。表情は曇りがちでなにか深刻な事を考えていそうだ。他の客たちが談笑している中、彼女だけが一人でただコーヒーを待っていた。

やがてコーヒーが届くと両手で——まるで湯のみでもつかむように——コップを持つと、ふうふうと息を吹きかけてから飲んだ。サンチョは彼女の所作を一部始終見ていた。視線が吸い込まれていくようだった。

彼女はコーヒーを飲み干すと、しばらく考え事をしているらしかったがやがて立ち上がり、サンチョは他の客にケーキセットを用意したあとにレジに向かった。

「あの……」彼女はうつむきながら小さく声を発した。

「今度、あさって、ライブをやるんです」

そこで初めて彼女はサンチョの方を見る。緊張でほほが震えている。ほほにはそばかす。

「そうですか。どこでやるんです？」

サンチョは気さくに、かつ失礼にならない程度の、絶妙なバランスで笑いかけた。彼女はギターケースについているポケットから数枚紙を取り出して、

「あの……ここです」とライブのフライヤーを恥ずかしそうに差し出した。

「なるほど、では、このチラシ、ここに置いておきたい、ということですね？」

サンチョは彼女が言い出しにくそうにしていることをさらりと言ったのけた。

「あ、えっと、駄目ですよ、そんな、図々しい」と彼女は弱気になってフライヤーを取り戻そうとしたが、サンチョの行動はすばやく、一枚をドアのガラスのところに貼って、レジ横に残りを置いていた。そして「大丈夫ですよ」と言った。

彼女はありがとうございます、と何度も頭を下げて去っていった。

翌日、テーブルクロスをクリーニングに出そうと思って3番テーブルのクロスをばさりととったのは、チャメだった。クロスの下に、彼女からの謎めいた手紙が入っていた。それも、サンチヨに向けてではなく、チャメに向けての手紙だった。

——駅前広場、緑の帽子、夜9時、チャメさん、待ってます。

それだけの短い言葉と日付が書かれていた。今日の日付になっている。

これは一体……。なんだろう？

チャメは店主にはなすべきかどうか迷ったが、結局おしりのポケットにしまって、黙っていた

。

案の定、チャメはいてもたってもいられなくなって、カフェの閉店のあと、明日の仕込みをすこして小一時間かせいでから、駅前へと向かった。駅までの道はとてもほそくくねくねしているので、へび坂と呼ばれることもあった。右手にはお好み焼きやが二軒あったり、イタリアンがあったり、コーヒー豆やさん（ここから一部を仕入れている）や携帯電話ショップが軒を連ねる。左手は写真やさんにドーナツやさん、ゲームセンターなんかがある。ここに車で乗り入れたが最後、ほんの百メートル進むのに十分ほどかかることになる。

駅前には以前、地上に線路が通っており、もう一本はさらに上を交差するかたちになっていた。地上の線路がなくなり、開かずの踏切が消滅した。かわりに大きな道路が通って、昔ながらの劇場やスーパーやおばあちゃんの「誰が買うの?」と思える服が売っている店がなくなった。

地上に駅があったころの名残はたったひとつ。黒板だ。待ち合わせなどにつかう連絡用の掲示板である。畳半分くらいの大きさの黒板が、歩道の真ん中に立て看板のようにつたっている。

チャメは坊主頭をさすりながら、手紙の彼女が来るのを待つ事にした。向こうはこちらのことを知っている。だが自分は彼女のことを知らなかった。さまざまな妄想が頭の中をよぎる。若いのだろうか、髪は長いのか、本当に女なのか（女だとは一言も書いていなかったことにチャメは気がついていない）どんな目的があって、どうして駅前で……。推理、考察、想定、空想。ぐるぐるとあれこれいろんなものがまわっている。

駅前は、路上ライブでも有名だった。駅の出口があったときはずいぶんにぎわったものだが、出口の位置が変わり、こちらにはあまり人が来なくなった。それでも習慣になってしまったシンガーたちのなくてはならない場所には変わりはなかった。

歌が聞こえてきた。みどり色の帽子を被った女性が歌っている。アコースティックギターにしてはすこし小さいような楽器を抱えて、マイクも楽譜もなしに、ただひとりで。

喧噪が、すべてを洗い流す。彼女の歌声もながされて、誰の耳にも届かない。静かなところで歌っても誰にも届かないかもしれない。だが、なんとなくチャメにはわかった。

黒板に 書いた ラブレター
卒業式の日 だったの
宛名だっけないし 汚い字で
おめでとう って大きく書いてる文字を
おもいきり消して 好きな事を書いた

そんなことを歌っていた。それからまた別の歌を歌いだす。チャメは静かに手紙の彼女が来るのを待っていた。どんな人だろう、そろそろ来るかな、そんなことを思いながら。

数曲、路上ライブの彼女が歌い上げると、小さな拍手がおこった。それからそそくさと楽器を

片付けてどこかへ行ってしまった。BGMがなくなったチャメは、ぼんやりと歩道を眺めた。道行く人たちに目を向けてみる。急いでいるひと、べらべらしゃべっているカップル、イヤホンで外の世界を遮断しているひと、化粧の濃い女性、寒いのに薄着の男性、いろんな人がいる。

ふと、掲示板が気になった。

——あれ？

チャメは不思議に思った。妄想の彼女の字でなにごとか書いてあることに気がついたのだ。

チャメ、屋根裏のシャボン玉企画会議は明日です。ドーナツを持って来て。もう私は帰りました。

まったく意味不明だ。屋根裏？ シャボン玉？ 企画会議？ ドーナツ？ どれもこれもピンと来ない。

しかも彼女はもう帰ったということだ。いつの間に。チャメは顔を見られたのだろうか。わからない。

茶柱坊主は突如として目の前にたくさんのキーワードがあらわれて混乱した。なにがどうつながっているのだろう。三角定規のサンチョに相談でもしてみようか。いや、ゆげじいのほうがこういうことはいいのかもしれない。坊主の頭に葛藤が飛び交う。

家にかえることにした。何を考えたところで、解決する糸口などないのだ。

翌日、朝一番になにげなく三角定規に尋ねてみて、あっさりと謎は解けた。

「ああ、屋根裏、あすこのライブハウスだよ。こないだね、みどりの帽子の彼女がパンフレット置いてったよ。ライブやるんだそうですよ」

何組かでやるライブは、特別に名前がつく場合がある。なんのことはない。このライブの名前は「シャボン玉企画会議」だった。

チャメとテン

屋根裏ライブは盛大におわり、無事にみどり色の帽子の彼女とチャメは会う事ができた。

ライブハウスは四階にある。狭い狭いハコだ。席などなく、みな立ち見である。チャージ代がここ数年で急に高くなり、客足がやや遠のいた感がある。

チャメと彼女は屋上にのぼった。ちょうど電車が見える位置だ。ふたりともフェンスに腕とあごをのせてとなりあった。

彼女の名前はテン。もちろん、あだ名。音楽をやっているときもあるけれど、絵も描いてるし、難しい事も考えている。ほほのそばかすを点として捉える。点=テン。

ドーナツをテンに渡すと、テンは本当にうれしそうにほおばった。

もぐもぐと口のなかにドーナツをのこしながら、なにごとか言った。おそらく「ありがとう」と言いたかったのだろう。

「ドーナツだけ、よくわからなかった。屋根裏もシャボン玉もわかったのに」

むせているテンの横でチャメはゆっくりまばたきをした。緊張しているときはゆっくりまばたきするにかぎる。

「好きだから」

「え？」

「ドーナツがたべたかったから」

テンはむせて涙目になりながら言った。

チャメは拍子抜けして、くすりと笑った。

「そんなことだったの」

「そんなこととはなによ」

「もっと素敵な秘密があるんだって思った」

「ううん。ぜんぜん。本当にドーナツが好きなの」

二人で笑いあった。電車が大きな音をたてて通る。郊外の方面へ向けての急行だ。しばらく低い金属音に会話も笑い声も途切れた。目で電車が通り過ぎるのを追う。このあいだにそれぞれ、気の利いたひとことをさがしている。もしくは、なにか質問したいことをさがしている。

「あの」

最初にくちをひらいたのは、チャメだった。

「どうして、オレなんだ？」フェンスから離れ、テンの方を向いて、真剣な目で見つめる。

予想していなかった質問にテンはすこしだけたじろいでまた表情をもとの笑顔にもどし、

「見せたいものがあるの。とっても素敵なのよ」

「オレに？」

「うん。だから」

「どんなの？」

「見てからのお楽しみ」

イタズラっぽくテンは首をかしげながらくちもとをゆるめた。

「ねえ、今度はわたしからの質問。いい？」

「いいよ」

「歌手にしても画家にしたっていいけど、そういう芸術家になるための条件ってなに？」

「なにいきなり。えっと、そうだなあ。うまくないといけないんじゃないかな。なににするにしても」

「本当にそう思う？」

「うん。だって、うまくない歌なんて聞きたくないし。絵もおんなじ」

「そうかなあ。わたしは違う」

「どんなふうに？」

「歌手になるためには歌えばいい。画家になるためには絵を描けばいい。それだけなんじゃないかな。うまいかどうかなんて、どうでもいい気がする」

「うん。それで？」

「抹茶のドーナツ、夜中に家で作ったでしょ？」

「え、どうして知ってるの？」

「ボウルに失敗作を投げつけたり、普段は間違えもしない塩と砂糖を取り違えたり……」

「だから、どこで知ったの？」

「キミの家とわたしの家は隣」

「う、うそだ」

「本当よ。ねえ、キミはチャメでしょ、わたしはテンでしょ」

また電車が遮る。夜の闇のなかを激しいブレーキで駅に停車する。人々が乗り込んでゆくのが見える。発車を促すベルが短く神経質に鳴り響き、電車はコーラのふたを開けたときのような音をならしてドアを閉め、また金属音を鳴らして闇に吸い込まれていく。

——チャームポイント。

「つまり、拡張現実よ」

テンはタブレット型のコンピュータを指で操作しながらいう。

いつか「見せたいものがある」とテンが言っていたそれをついに見る日がチャメにやってきた。テンの家は隣だったが「事務所」は別にあり、駅の北側の行列ができるクレープやさんの角をまがり住宅街をすこし入ったところにある。

事務所の入り口はなんの変哲のないアパートに見えた。一室を間借りしてそこにコンピュータや絵の道具や楽器なんかを置いていた。機材があれこれとあって、雑然としているように見える。配線もからまりあい、うずたかく積まれた黒く四角い機械が部屋の体積を圧迫してかなり狭く感じる。どこにも椅子はなかった。

なんでもないようにテンは配線を踏みつけないようにつま先立って歩く。チャメは綱渡りでもするようにフラフラと線の束をかわした。いくつかの絵が部屋を飾っている。前衛的な絵だ。さまざまな色を横に流れるようにただ描いているだけのもの。水滴をしたたり落としてそれらが偶然飛び散った様子を保存しているようなもの。花のようにみえるが点描画になっている絵。部屋はカーテンが閉じられていて薄暗く、どことなく気味が悪い。

座ると危なそうなところにテンは平気で座った。チャメは迷いながらも仕方なく座った。

「拡張……現実？」とチャメはあいのてを入れる。

「そう。わたしが研究しているのはAR(Augmented Real)。もう五十年も前から研究されていて、思想自体はすでに完成していた。だけど、キャプチャーの解像度が低くて話にならなかった。またアノテーションのアウトプットも精度の問題でちっぽけなものしかつくれなかったの。わたしがこの技術を知ったときはすでに携帯電話に応用されていたし、デジタルカメラにも機能が搭載されはじめてた」

「いったい、何のはなし？ 専門用語だらけでさっぱりわからない」

チャメは混乱していた。みどりの帽子でさわやかに歌を歌う若き女性のイメージとはあまりにかけ離れていたからだ。

「携帯でビデオカメラモードにして、街を見てると吹き出しがでてくるサービスってあったでしょう？」

テンは自信たっぷりに唇の端をあげて微笑んだ。

「ああ、子供の頃すこし遊んだ」

「つまりああいうこと」

「それがAR？」

「そうね。もうすこしちゃんと説明すると、現実を見ている普段の目ではなく、電子機器をつかって同じ映像を見ていて、その映像が現実に加えてなにか情報を与えてくれることをそう呼ぶのよ」

「飛行機のHUDなんかもそれに近い？」

「おお、いいところに気がついた！ 素敵ね。空から目はずせなくて計器を見られない場合が

あるけれど窓に電子的に計器を表示すれば視線のうごきも省略できるものね。あの技術はもうすでに自動車にも使われていて、ナビと連動して道案内をフロントガラスに表示させたりわかりにくい位置に標識がある道路も違反せずに通過できるようになったわ。ただ、いまのところ高級車にだけその技術が使われてる」

テンはそれだけいっきにまくしたてると、立ち上がり、カーテンを開けた。

春の香りが少しまだ寒い風に乗ってやってくる。チャメとテンはひとしきり拡張現実について話したあと、窓のそとにある庭へ出た。

庭といっても申し訳程度で、共有のものである。あしもとにはまばらに雑草がはえており、すずめが砂にもぐって羽を洗っていることもある。猫の通り道でもあり、三方がすこし高めの塀で囲まれている。塀の向こうはすべて家で、洗濯物やら窓の中やらが乱雑に目に入る。

「へえ、こんな庭があるんだ」とチャメは感心して目を見開きながらいった。「これだとキャッチボールはできないけど、卓球なら台さえあればできそうだね」

テンはチャメのほうをちらりと見てちいさくこくりと頷いた。まるでそっけない態度である。「見せたいものは、たくさんあるんだけど」と塀の一点を睨みつけながらテンは言った。緊張しているように見える。

「どうしたの、急にあらたまって」

首をかしげるチャメを無視して塀のすみっこにおいてあった掃除機のようなものを手に取って、重そうに庭の真ん中へ運んだ。

「何がおきるの？ これ何？」

興味津々で坊主頭をさすりながらチャメは掃除機のようなものを見つめた。

「いいから黙ってて」

真剣な顔つきでその機械から電源コードを取り出し、いつのまにか引っ張って来ていた電源タップに差し込む。

掃除機のようなもの、というのは灰色のプラスチックの車の先に蛇腹のホースがついている。というか灰色の掃除機にしか見えない。

「いくわよ」

テンがホースを空に向けて構えた。いったい何がおこるといふのだろう。

そして、電源を入れて、空気が吐き出される音がすると同時に、

ひらひらと、しろいトランプくらいの大きさの紙が一秒に四枚くらいずつ出て来た。

勢いよく、それらは空へ舞い上がり、一定のところで上昇をやめて、下降しはじめる。

それがどンドン庭の地面に落ちてゆき、すこしずつたまっていく。

しろいそれには一枚ずつ言葉が書かれていた。

テンはもっとペースをあげた。さくさくとホースの先から紙がとびだしてくる。

チャメはずっと空を見上げていた。

ひらひら。ひらひら。白い紙の群れが空から落ちてくる。

一面が紙で埋め尽くされるほどたくさん出て来て最後の一枚が地面に着いたときようやく、テンは笑った。

「どう？　すごいでしょ」

「すごい。これは何？」

「なんだろ。名前なんてない。定義もしてない」

「決めないほうがいいのかもね」

チャメがそういうとテンは突然、手を叩いた。

「そう言ってくれたひと、チャメが初めて」

うれしそうだった。何のことかわからずチャメは大量の紙に目をやった。

「この言葉たちって、どうやって選んだの？」

「えーとね。辞書でランダムに開いて、目についたものを選んだ」

「ふーん。なんか感動した」

「うん」

二人は紙が積もった庭をしばらく眺めて沈黙した。沈黙するのも悪くない。

「それでさ」

「うん？」

「どうやって片付けるの？」

「この機械は掃除機にもなるのよ」

「へえ！ それもすごい」

「巻き散らかした言葉の塚をもう一度綺麗にするのよ」

System Of Michiru

チャメとテンは白いカードたちを片付けると、部屋に戻った。

「お茶入れてよ」

すっかりテンは年上であるチャメに命令している。初対面には弱い二人だったが、なれてしまうとずけずけと言いたい事を言いあうようになる。

散らかった配線をまたいで、チャメはお茶の用意をする。赤いポットにはたっぷりとお湯が入っている。お茶の葉はシズオカの葉だ。筒のふたを取り外してチャメは香りを確かめ、芳醇なそれに、頷く。

チャメは集中した。お茶のことになると、目つきが変わる。

まずは湯のみを温める。湯のみの温度を確かめながら、急須に茶葉を注ぎ、ついでお湯を注意深く絶妙な量を均等なタイミングで注いだ。湯気が逃げないようにふたをし、しばらく待つ。その間に湯のみのお湯を捨てる。お盆と受け皿を用意し、頭の中できっかり二分を数える。チャメの秒針は完璧で、コンマ一秒もずれない。友人によくカップ麺の砂時計のかわりにされるのを思いだす。頭のなかでアラームが鳴る。右手の先でふたを押さえ左手で取手を持って、温めておいた湯のみに、交互にすこしずつ注ぐ。あせってはならないが、のんびりしていてもいけない。最高の状態にするために神経を研ぎすませる。ここで間違えると、茶柱はたたない。お茶が流れるその液体の流動する様を一点見つめ、左手の角度を調整する。

——できた。

茶柱をたてることができた。ひとつだけ。もうひとつはできなかった。チャメは一度だけ大きく肩で息をすると、急須を置いて、お盆に湯のみを載せて、運んだ。足下がとても危ない。下手をするとここで茶柱が沈んでしまうかもしれない。

「はい。お茶」

チャメは最後まで気を抜かずに、しかし、最高の笑顔でお茶を届けた。

「わあ、チャメって本当に茶柱たてられるんだ。すごい」

「うん」

「謙遜はしないんだ？」

「しないよ」

「どうして？」

「意味がないから」

「そうね。じゃあいただきます」テンは一口飲んで目を丸くした。「お茶にいただきますなんて言った事なかったや。へへ。いつもと同じお茶なのに、すごくおいしく感じる。あれ、チャメは飲まないの？」

「猫舌なんだ」

恥ずかしそうに坊主頭に手をあてて、はにかんでいるチャメをみてテンは大きく笑った。

ひとしきり笑うと沈黙が訪れた。沈黙も悪くない。

「見せたいものなんだけど、じつはまだ完成してないの」テンが沈黙を破る。

「え、じゃあどうして呼んだの？」

「それなりにたのしいものがたくさんあるから、とりあえずいっかって思って」

「なんだそりゃ」

テンは立ち上がり、近くの机の引出しをあけて、パンフレットらしきモノを取り出し、チャメに渡した。

「これね、ITCっていうコンテストに、わたしの作品を出品してみたの」

「へえ、すごいじゃん」

「出品するだけならお金出せばだれでもできるから」

「そうなの？ どんなのを出したの？」

「ミチル」

「え？」

「ミチルシステム。さっき言った拡張現実をつかった一〇〇インチディスプレイにアセンブリしてシステム側からの電源を……」

「わかったわかった、で、つまりそれを一言でまとめると？」

「流れ星やさん」

この街のへび坂をくだったところに、カフェ「星差し指」はあった。経営をはじめてからもうかれこれ一年が経過した。固定客も増え、芸能人の何人かも店に寄っては、サイン攻めにあたりしていた。店にはサインのひとつもない。まがったところが嫌いな三角定規みたいな店長がいうには、この店はぼくの店であってサインした芸能人のためにあるわけではない、ということだそうだ。たしかに芸能人にすぎるように、誰々が絶賛していたとか、テレビにとりあげられました、といつまでもその栄光を掲げている店もある。三角定規のサンチョはそれを避けたかった。

彼の休日は、妻と二人で散歩をする。彼らはこの街が好きだ。海外に修行に出た際もひとときもこの街のことを忘れなかった。彼らは駅が地下になって国道が片側二車線になる工事にひたすら反対し、署名運動にも積極的に顔を出していたが、海外にいる間にすべてが決定しており、戻ったときには工事も後半にさしかかろうとしていた。

今日も妻のエリサと散歩である。エリサという名前はまるで外国の名前のようだが、漢字で、まさしくこの国の人である。ひよろながい手足と日に焼けたような茶色い肌、でかけるときはいつも帽子をかぶっている。

午前中に歩き始め、てきとうな場所でランチを食べ、公園で本を読み、街をぶらつき、夕食のために買い物をして帰る、というのがいつもの休日。今日はすこしおもむきが違った。

「今日は品評会でもしよっか」エリサの無邪気な声。サンチョとの不釣り合い具合がなんとも言えない。

「そうだね」サンチョはすこし甘えた声を出す。

公園までの道をぶらぶら歩き、あらゆる洗濯物に注目しながら、そのバランスを品評するのだ。

タオルばかり干している美容室のバックヤード、大人も子供もごちゃまぜの団地、カラフルな服やズボンが綺麗に配置してあるマンションの屋上、昼間で晴れていたら、どこででもできる遊びだ。

「ねえ、あっちのはどう？ 靴下がぜんぶしましまでかわいくない？」

「いや、こちらの梅を干してあるだけのベランダの方が潔い」

このように、意見はまったく噛み合えないが、それぞれの評価で優秀賞を与えられる。

そして、その家には「星差し指」の無料招待券が、ひそやかにポストに入れられる。

その家の誰かが何気なくカフェにたちより、そういえば、と無料招待券を差し出すと、サンチョは笑顔で洗濯物品評会のことを説明する。客は、さっぱり理解できない様子だった。

「おめでとうございます、あなたは記念すべき洗濯物品評会の優秀賞を受賞されて、しかもこのお店に来た最初のおお客様です」

「は、はあ……」主婦らしき女性は困った様子だった。

「あなたの家の洗濯物は、靴下がしましまで、それを整然と並べ、風にたなびく姿は、洗濯物の鏡のようでした。まさに美しい、代表的洗濯物です。あなたのお名前は？」

「テガミです」

「なんと珍しいお名前。テガミさま。あなたは、このカフェでは、コーヒーが永遠に無料です」

「え、永遠に、ですか？」

テガミは薄手のカーディガン（薄紫）に白いズボンで、とても爽やかな女性である。おそらくサンチョと同じくらいの年齢であろう。つまり四〇代だと思われる。

「そうです。招待券を持って来たお客様は永遠に無料。この店がつぶれてしまうまで、ずっと無料です」

「そりゃあよ、アンタ、近頃物騒な世の中なのかどうか知らないけれどもヨォ、えー？ ちいと道ばたにでも目を向けてみなよ。花だって咲いてるわ、イヌだって楽しそうに歩いてるじゃないか。暗い世の中だなァんていうやからの言う事を鵜呑みにしちゃってエよ。こんなんだから気づきもしないんだヨ。えー？ そうはいつでもね、あたし最近物忘れがひどくなっちゃまってねエ。ゆげじいの顔もわからないでやんの。わらっちゃうねえ。えー？ 本当だよ」

クリーニング屋の「マイセルフ」のもう一人の店主である、ゆげじいの妻、トヨはとにかくよくしゃべる。考えている過程をすべて口にしなければ気が済まない。薄手の着流しとかんざしを差した、本当に「おばあちゃん」の見本のような身なりだ。

サンチョはトヨの誕生日パーティをするためカフェへ招待した。ゆげじいやチャメはもちろん、息子夫婦も孫をつれてやってきた。さらにゆげじいにそっくりな弟とトヨとは似ても似つかない兄もそれぞれの家族をつれてやって来た。大所帯である。上のトヨの言葉は、ケーキのロウソクを消すために一言お願いしたところ、よくわからないスイッチが入ってしまったトヨが勢いづいた様子。

「まァ、とにかくね、あたしゃもうね、なんてたって幸せ者ですよ。こんなに家族に囲まれてね、隣の喫茶店の定規みたいな店長と芝刈り機みたいなあんちゃんもイイひとでね。えー？ このケーキは今日のために考えに考えてつくられたんだってエ？ なんでもスモモと砂糖とあとナントカっていうモノをつかって、いやァ、なんだかよくわからんけどあたしはうれしいです。えー？ しゃべってないではやくけしとくれって？ あァ、わかってるヨォもう。本当にせっかちなんだから。いつも皺を伸ばすときはあせってはいけねエって自分でいってるくせによォ、あたしの目尻の皺ものばしとくれヨ。本当に。えー？」

ロウソクがなかなか消えない。チャメはケーキの秘密に気がついて、サンチョに耳打ちする。

「シュガープラムフェアリー」

サンチョはチャメの言葉に頷いて、言葉を返す。「新聞は読んだか？」

本来、スモモはケーキには合わないが、今回あえて使ってみた。何度も失敗したが、干しプラムを使ってクリームと混ぜてしまえばいいのだ。

砂糖とプラムが入って、あとは”妖精”が揃えば味付けは完了。もちろん、妖精とはトヨのことである。

国境なんてないとうそぶく人たち

「どうしてテンは、音楽もやったり絵も描いたりコンピュータのことをやったり、そんなに多彩になんでもこなしちゃえるの？」

「どうしてだろう。べつに考えた事ないけど。そんなこと言ったらチャメだって、洋菓子のドーナツに、緑茶だし、フランス語だって話せるんでしょ」

「そうなんだけどさ。それは『カフェの業務』ってことで一貫性があるから」

「ふーん。だったら『あたし』ってことであたしにも一貫性があるわ」

「うーん。まあそっか」

「そうよ」

「ねえテン、こないだ言ってたナントカコンテストには出品したの？」

「したよ。ITCね。落選したけどね」

「え、そうなんだ。いい作品なのに」

「仕様に違法性があるから、だめなんだって」

「違法性？ そんなのあったっけ？」

「あるのよ」

「どんなところに？」

「電力を無線で盗んでるところ」

「えー？ ということ？ 無線でどうやって電力を？」

「随分前にアメリカ軍が開発した技術よ。イラク戦争のときに電力が足りなかったんじゃない？」

「すごいんだけど、その技術ってテンが簡単に使えるようなものなの？」

「アメリカ空軍のウェブでのやりとりをハッキングして仕様書をいただいたのよ」

「ちょっ、えー？」

「チャメは気がついてないかもしれないけどさ、一見あの国の技術者たちはいい人たちで、おかげでインターネットとかウェブサービスが使えるし、翻訳機能とかも充実して、なんか国境がなくなっていくような感じがするかもしれないけど、全部幻想だから」

「幻想って……」

「あたしたちが知らない間に、この国のありとあらゆる道路がネットで見られるようになったでしょ。地図だっていつ航空撮影するために飛行機が飛んでた？ 見た事ある？」

「そういえば、ないね」

「あたしたちに抵抗する方法はあると思う？」

「ない」

「じゃあ誰がとめるの？ あの地図とか翻訳とか、全部、アメリカにあるたったひとつの会社がやってる仕事なんだよ」

「難しいね」

「難しいからって考えを放棄してたら、そのうち本当に国境なんてなくなるのよ。ぜんぜん気が

つかない間に侵略されてるのよ」

「それは大げさだよ。明治維新のときだって、侵略はされなかったじゃない」

「本当にそう？」

「なんだか意味深な展開だね」

「明治維新でやったことは何？」

「西洋の文明をうけいれる……こと」

「ほら、占領なんかしなくてもいいって、とっとも都合がいいじゃない」

「で、でもちゃんと日本の文化は残ってる」

「どこに？」

「地域の名産とか、方言とか」

「あなた地方にいったことないでしょう。地方の若者は関西以外、もう方言を話さないのよ。名産だってこじつけだし。ハママツはうなぎが名物だけど、養殖でもっとおいしいものがトーキョーにいくらだってあるわよ」

「じゃあ、テンは、あれなの、日本の文化は全部終わってるっていいたいの？」

「全部とはいわない。今海外で評価されてるのはアニメとITだけ」

「うん。そうだね」

「でも国内ではどう？」

「アニメオタクにパソコンオタク」

「評価は芳しくないね。こんなにも矛盾があるのよ」

「考えたこともなかった」

「電力を盗むことを考えたアメリカの技術者だって、アメリカの文化を守るためにやったのよ」

「なんかすごすぎる話をきいた」

「もしかしたら今日だってあたしたちの個人情報をしらないあいだにとってるかもしれないのよ」

「どういうこと？」

「レジについてるモニタってあるでしょ？ あなたの店にはないわね。コンビニなんかについてるやつ」

「ああ、広告ながしてるやつのことかな」

「あのモニタだって、カメラがついてて個人の顔を認識して、何を買ったか履歴を残してるかもしれないじゃない」

「へ、そんなことはないでしょう。いくらなんでも」

「アメリカではほとんどのスーパーマーケットで導入されてるのよ」

「え……」

「怖いでしょう。なにもかも監視されてる世の中って。それも技術者たちが主権をにぎってるのよ」

「あ、抵抗する方法を思いついた」

「なに？」

「電子レンジと掃除機をいっしょにうごかすんだ」

「……？ 何を言ってるの？」

「停電させるんだよ」

「あはははは！ 面白い！ それだと電気が使えないじゃない」

「あ……そうか。わかんない。答えなんてないよ」

「そうね」

「ところでさ」

「なに？」

「本当にテンは十代なの？」

扉の写真と空の写真を撮り続ける男

サンチョは苺のケーキを作った。最近なぜかメニューにないものがむしょうにつくりたくなる。

カフェ『星差し指』は、白い外装に白い内装、扉も白で、ほとんどが白いもので囲まれている。サンチョが大事だと思っているものが白いものに多かったからだ。消しゴム、靴、帽子、調理服、それにパソコン。

椅子はナラの木。デザイナーに頼んだもので、ちかくの家具工場で作してもらった。床はオークのアンティーク材。もちろん無垢。テーブルも床に合わせてオークを使った。こちらは合板モノで費用を抑えた。

テーブルのマットは、サンチョの妻であるエリサがレースを編み上げて作った。とてもうつくしい白いマットで、模様はシンプルな編み方になっていて、さりげなくてかわいい。

扉は、最初緑色だったが、二年目の春に白に変わった。

ちかくに住んでいるらしい、扉マニアの若い男がつくったアンティーク調の扉。

その男をラルバという。ラルバはおかしな男で、人間に生まれてくる前はカメラだったんですと言う。たしかに正確に色や形を捉える力はすばらしく、寡黙な姿は、どこかしらカメラをイメージさせるものがあったが、サンチョは前世がカメラだったという人を生まれて初めて聞いた。たいていはうだつのあがない農民だったとか、たいして目立たない動物だったとかという話である。

コーヒーを飲み干してしまい、今日は客が少ないこのカフェで、ラルバとサンチョは少し話した。

もっぱらカメラの話になる。

サンチョはフランスに留学していたときの事を思いだしながら、

「当時はフィルムがまだギリギリあったから、ぼくは二眼レフのカメラをつかってたよ」

とタバコをくわえて、洗い物をしつつ言った。

「上から覗き込むタイプのものですね。今はもう絶滅しちゃったかもしれませんね。自分はデジタルカメラです。小さな一眼レフが主流になってきたときに買ったカメラをいまでも大事にしています」

「ほう。被写体はなにかね」

「やはり扉と、あとは……空ですね」

「空？」サンチョはタバコを灰皿で消す。流しで作業をしていてそのまま捨てればいいのに、なぜか灰皿をつかってしまうのがサンチョらしいところだ。

「そうです。なぜ空なのか。自分でもあまりよくわかりませんが、どこへいっても、どんなタイミングでもいつも頭の上にあるので、シャッターチャンス逃す事もないし、毎日別の雲が広がって、それを撮るだけなら技術もいらぬですから」

「ほう。扉はどうして撮っているのかね」

「カメラを買ったときに、このままなんとなく撮るだけだと、撮りたいものが何かわからないま

ま写真をやめてしまうのではないかと思ったのです。なにかテーマが自分に欲しかった。あつめられるものが。植物でもよかったかもしれないです。でも街のなかで植物って、種類がすごくすくないことに気がついたんです。しかも絵になるような綺麗な花を咲かせるものなんてぜんぜんないんです。あと考えたのは日本瓦の家紋。いくつか写真に撮ってみました。種類があまりに少なくて断念しました。落書きとかも集めたら面白そうだったけど、いちばん面白い落書きがあるのはトイレで、トイレで写真を撮ることがすごく抵抗があってやめました。それで、バリエーションも多く、オリジナリティもある扉に決めました」

「そして扉の写真ばかり撮ってたら、つくるようにもなった、と」

「そうです。家具屋で仕事してたこともあって、図面とかもかけたので」

「扉の写真は何枚くらいあるのかね」

「ざっと千枚くらいはあります。このあいだ本も出しました」

「すごいね。なんなら、ここに本置いてもいいよ」

「あ、いや、そんな。名刺だけ置いときます。メールアドレスも書いてあるし」

「そんなんでいいのかね」

「はい。rarubahkunに@gmail.comで届きます」

冬は友達のはじまり

地下の工事のとき以来はじめて、この街に雪がつもった。カフェ「星差し指」がオープンして、春になれば二年というところである。

テガミは、冬になるとカフェにときどき顔をだすようになった。あまり話をせず、ただひたすらにコーヒーを飲んで帰っていくだけの日々であった。見た目は、おしゃべり好きな中年女性であるにもかかわらず、ほんとうに静かで、なにか考え事をしているようだった。

あるとき、テガミに手を引かれてサングラスをかけて杖を携えている少年がやってきた。どうやらテガミの息子らしいことは誰の目にも明らかであった。少年は不安げにきよろきよろとまわりを見渡し、杖を小刻みに前へ出してテーブル席へついた。

メニューを渡そうか迷い、決めかねて、チャメがうろうろとしてから、結局メニューをテガミに渡し、今気がついたかのように「息子さんですか？」とたずねた。チャメは究極に社交辞令が苦手で、緊張してしまって声も震えていた。

「そうなの。カゼをふたつちょうだい。ひとつはお金払うから」

テガミは軽く受け流していった。サングラスの少年はぴくりとも動かずに二人の様子を聞いているようだった。

カゼというのはコーヒーのことである。不思議な名前のコーヒーだが、この店には不思議な名前のものでしかないの、もうなにが不思議なのかチャメはよくわからなくなっていた。カゼ、ハナ、ソラ、ツキ。すべてコーヒーの名前だ。もちろんそれぞれに由来があって、意味もちゃんとそれに見合ったものである。たとえばカゼというのはもちろん「風」のことで、豆の原産地のアフリカの高地で吹く特別な風の名前がこの豆についているのである。ローストを強めにしてコクと苦みが特徴のものだ。この四つのなかではハナが一番苦みがすくない。「花」つまりタンポポを原料の一部としている。ソラは「空」で南米でとれる豆だ。ツキは「月」のことで豆科のなかでも珍しい、夜に花が咲くタイプのものからとれた豆である。

チャメは、今日ひとりで店番だった。サンチョは仕入れに出かけた。ナガノにある牧場と契約してくるのだそうだ。

コーヒーをつくりはじめる。雪はもうやんだが、客足はかなり遠のいていた。いつもの売り上げの半分ほどしかなかった。客はいまテガミ親子の二人だけである。

寒さのせい、コーヒーからいつもより多くゆげがでてくる。テーブルにつく頃にはすこしさめてしまうな、と考えながらチャメは慎重に運ぶ。

「おまたせしました。お砂糖はテーブルの上にありますので。ミルクはどうぞこちら。おかわりは自由なんで言ってください」

「ありがとう。ねえ、チャメ、いま手はあいた？」

カウンターの中へひっこもうとしていたチャメはおどろいて振り返った。「はい。お客さんは今二人しかいませんし」

「なら、私たちの話相手になってくれない？」

「あなたたちさえよければ、喜んで」

テガミの正面にすわっていたサングラスの少年は、カゼを口に運んだ。ブラックで苦くないのかな、とチャメは余計な心配をしながら、二人の微妙な距離をはかった。

「この子、目が見えないの」

テガミは少年の方を見ながら、チャメに言った。どきっとした。確かに言われてみれば、目を隠すようにかけているサングラスや、足がわるそうでもないのにしている杖などからそれはなんとなく想像していた。しかし、実際にそういわれるとドギマギしてしまう。

「お名前はなんというのです？」

「楡」

「え？ なんですか？」

「ニレ。楡の木のニレよ」

「言葉は話せるのですか？」

チャメがいうと、楡は「だいじょぶだよ」と言った。声変わりする前の幼い声だった。年齢を聞くと十一歳ということだ。

「おにいちゃん、冬からはじまるものってなんかある？」

楡はいきなり意味深な質問をした。

「冬から？ なんだろう。おでん？」

「ちがうよ。友達。冬春夏もしくは秋。ぼくの名前を呼んだらいつだってそこへいくよ」

深夜、サンチョは帰宅して、風呂に入り、厚着をしてベランダに出てタバコを吸う。

冬はもうすぐあけそうだ。そんな予感だけが、風の芯がやわらかくなったことでやってくる。

見上げると月が浮かんでいた。下弦の月だ。斑雲（むらくも）が月を通り過ぎては、また別のそれが通り過ぎる。

サンチョ夫婦には子供がいない。部屋でタバコを吸ってもよいのだが「子供ができたときのために」と、ベランダでホテルになることを自らすすんでやり、なれてしまった。サンチョは、タバコの煙を吐き出した。何も考えずに煙の行き先だけを見ている。煙の中には彼のため息も混じっている。だれもがそうとは言い切らないが、タバコにはため息を出させるための呼吸を促す側面もある。

秋から冬にかけて夜空は澄み渡ることが多い。空気が冷たくなることで透明度が増すようなのだ。彼は詳しい事は知らないが、タバコを吸うと夜空も見られるので、ぼんやりそんなことを思う。

さて、この先、星差し指はどんな展開が望めるだろうか。

近所のカフェ事情が耳に届くことがあるが、入れ替わり立ち替わり新しい店ができては無くなってゆくらしい。そんななかで星差し指は少なくとも二年は運営ができている。線路の向こうにあった老舗のカフェ「いーはとーぼ」はご主人が亡くなってしまって、店は誰かに買い取られてネイルサロンに変わった。あそこのコーヒーはフレンチローストで、濃い。音楽の音量が大きくて、持って来た本に没頭できた。星差し指のすぐそばにあったチェーン店のカフェは、食器洗い洗浄機の洗い方が足りなくていつも少しにおうカップで提供されていて、客足が遠のいていつつぶれてしまった。それぞれに事情はあるものの、カフェがつぶれてしまうことは何か友人を亡くしたような哀しみに浸ってしまうサンチョなのである。

そんな感傷にひたったあと、あたらしいメニューについて考えた。サンドイッチだ。

パン生地は少し茶色い生地にしたのでライ麦を使う。パンを直角三角形に切ったら、そこに自作しておいたペーストを塗る。このペーストにはオリーブとタプナードが入っている。辛みが逃げないようにマスタードはもう一方へ塗る。そこへ先日契約してきた牧場でとれる生ハムを三枚と、同じ牧場のモッツァレラチーズと、近所の農家で仕入れている新鮮なレタスとトマトをのせて、パンで挟めば出来上がり。三角定規のサンドイッチと命名した。頭の中でサンドイッチが組み上がり、つい唾液が口から垂れそうになる。うまそうだ。きっと売れる。

それから、もうひとつ、客のテンから提案があった。それは、流れ星やをカフェの前でやりたい、ということだった。ちいさな小屋をトタンでもなんでもいいので作り、天井にディスプレイを設置するのだそうだ。法律的に歩道にそのようなトタン屋根を置いてしまうことはまずいのではないかと心配したサンチョであったが、そのあたりの法律については調査済みなのよ、と力強い返事がかえってきたので、任せる事にしたのである。おそらく小屋をつくるのにラルバを呼べば、すぐに雰囲気のあるものができるだろう。

——おもしろいことになってきた。

サンチヨは心の中でつぶやいた。

Travaillons avec nous.

サンチョの新メニューのサンドイッチは、雑誌にとりあげられ、カフェに常連客だけでなく新規の客を多く増やした。雑誌の効果は計り知れず、しばらく好景気が続くことが予想されるが、もちろんサンチョは、新規客が物珍しくて来店していることをちゃんとわかっていた。一度だけ来て、もう二度と来る事はない。都会の客はそういうものだ。いくらだってカフェはある。どれほど努力をしてもおなじようなレベルの店が、それこそ星の数ほどあるのだ。

最初は、そういう「一見さん」をいかに二度目の来店を促すかという、販売戦略の一環としてしか考えていなかった。流れ星やさんのことである。

ラルバに店のデザインを考えてもらった。道路からいつでも引き上げられるようにローラーが仕込んである。トタンでできた壁はいい具合に錆びたところがあり、そこへツタを這わせた。四方ぐるりとトタンで囲う。最近ではめっきり見なくなった公衆電話ボックスの大きさ二つ分くらい。正立方体ではない。長方形の立方体である。天井には屋根がないようにみえるが雨を凌ぐためにうすいフィルムのようなものが貼られている。その下にミチルシステム、つまり透明ガラスがやや傾斜した形で設置されていた。ドアはひとつしかないの、そこへ入った人は空を自然に見上げる事ができるような絶妙な角度を調整するのに時間がかかった。大人も子供もどんな身長のひとつでも見られる設計である。

電力を電線から奪う計画をしていたが、法律的に厳しいものがあり、ソーラー発電に仕様を変更したのは直前になってからだ。テンはシステムのチップをより小さいものに変更し、消費電力を抑えることを最優先事項として考えた。

このようにして、流れ星やさんが形をもち、完成したのころには、春になっていた。

サンチョは新たにアルバイトを募集した。調理兼ウェイターをしていたチャメは調理専門になった。客が多くてたちまわれなくなりはじめたのだ。

面接にも大勢が押し掛けた。カフェが忙しいのでべつのカフェで面接を、ラルバが受け持った。

ラルバはサンチョからどんな人を採用すればいいかを聞いたところ、フランス語ができてルナル詩華集を穴があくほど読んでいる人ならば、大丈夫だ、とわけのわからないことをいうので、わけのわからないまま言う通りにしたところ、一名候補が現れた。面接にくるのは女性ばかりだ。なにしろウェイター・ウェイトレスを募集したのだから当然である。ラルバは面接で、彼女らの経歴うんぬんよりも「品」を評価の対象とすることにしたので、履歴書は名前を確認するためのものでしかなかった。

ラルバの本音をいうと、好みのタイプがたまたまフランス語ができれば、それでいいような気がした。フランス語を勉強するにあたり、ルナルの文学にはいつか必ず触れることになるだろう。穴があくほど読んでいるかどうかはわからないが、避けて通れない道であることに間違いない。

採用されたウェイトレスは、本当にフランス語が堪能らしかった。二十代中盤くらいの年齢でミディアムボブのフレンチカールな髪型、ほわほわした鼻にかかる声をしている。

こうして、カフェ星差し指に新たな仲間が加わった。

「Que votre nom? 」とサンチヨ。

「Je suis Antoi」 と彼女。

彼女の名前はアントワさん。

流れ星やがオープンした。週に一度だけ、どこかの曜日で適当に営業が開始される。すごく気まぐれで、最初の客がそこに入るまで二ヶ月もかかった。八週間ものあいだ、誰一人、流れ星をわざわざ見ようとする人がおらず、開発者のテンは非常に落胆していた。落ち込んでいるあいだにもいくつかの音楽活動をこなし、ネガティブな歌をうたってより一層、深いところまで精神が転がっていた。

最初の一人は、女性の三人組だった。三人そろって入ろうとして、一人ずつ入ってください、とぴしゃりとアントワにいわれ、最初の一人が体験して、結局三人ともが流れ星をみて帰った。そのときのはしゃぎようはすさまじく、大きな声が付近に響いて、通行人たちの注目の的となった。

貼り紙は、この頃いっさいなかった。ただトタンでできた四角い謎めいた大きな箱にしか見えない。味もそっけもない。貼り紙を提案したのはサンチョだ。サンチョはテンを呼び出し、熱心に質問してから、貼り紙の内容を吟味しようと考えた。

閉店後までテンが店にすることが最近増えた。今日も深夜まで残っている。なぜなら、システムにバグがないかチェックをしているからだ。

洗い物や明日の仕込みをしながら、

「この流れ星やは、願い事がかなうのですか？」とサンチョ。

「そんなことありえるとおもいますか？」とテン。

「どうでしょう。ささやかな願いならば叶いそうなきがします」

「だれがささやかかどうか決めるの」

「神様でしょう」

「どこにいます？」

「システムのなかに」

テンは吹き出した。しかしサンチョが冗談をいっているようには思えなかった。本気でそう考えているのだろう。顔がまじめだった。笑われて機嫌を損ねてしまったかもしれない。

「ごめんなさい。笑うつもりはなかったの。本当に願いがかなうならいいなあとおもいます」

「心理学の分野では、予言の自己成就という考えがあります」

「サンチョさん、そんなことをご存知なんですか。すごいですね」

にっこりとテンが笑う。カウンタ席に座ってテンはコーヒーを飲んでいる。パソコンのディスプレイを覗き込みながら。話半分にしかきいてないかのように見える。それでも、ときどきみせるこのにっこりとした笑顔を見た人のほとんどが怒る気力がなくなってしまう。

「つまり予言の自己成就を利用するんです」

「うんうん」

「人間は、なにか特別な場所で願い事をするそれを覚えているものです。いつ叶うかな、どうなるのかなと日々、不安とわくわく感の間をいったりきたりしながら、待ち続けます。小さな、ささやかな、願い事をこの流れ星やに願えば、必ず叶う、とすれば、どうでしょうか」

「なるほど。でもそれだと、叶わない願い事はどうなるのですか？」

「それは大きすぎた、と判断させればいいでしょう。大きい願い事や、よこしまな願い事は、ぜったいに叶いません、と言い切れればいいのです」

「あ、おもいついた」

テンが突然立ち上がって、背筋をのばし、姿勢をただしながら、

「いまボーダーのシャツってはやってますよね。無味良品の。あれを禁止したらどうかなあ」

「どういう意味ですか。唐突ですね」

「しましま、とくによこしまは禁止ってことで、駄洒落です」

「ふうむ。それもいいかもしれません。来週あたり、貼り紙をだしておきましょうか」

それが鉄の階段らしいことはその独特の音でわかった。階段に足をのせると、なぜかひんやりした雰囲気がつたわってくる。冷房の室外機の熱風から逃れて、ようやく涼しい風がやってくるわけだ。階段をのぼりきるとドアが左手についている。おそらくアルミ製であろう。妙に自分の足音が響いて、まだ残響がある中、ドアを開ける。さらにひんやりとした風が入ってくる。そして急にそれまでと違う音が流れる。これは何の音だ、と想像していると、ラジオだということがわかった。低く紳士な声でなにやら「夏のドライブ」の話をしている。靴をどこかで脱がなくてはならない。向きがわからないが、ほかの靴に勢いよくぶつからないように細心の注意を払いながら、つつと小さな歩幅で受付へ。

「あ、楡さんこんにちは」

自分を呼ぶ声が聞こえる。頷くと、鞆の中から保険証を取り出した。この部屋はものすごい匂いがする。消毒液や特殊な液体の匂い、あとは人間の匂いが強烈にした。鼻の奥がひりひりとする。たくさんひとがいるらしいことは想像がついた。妙に明るい音楽が流れている。ドライブにふさわしいそれは自分を不快にした。受付をすませると、どうして自分のような盲人が補助の人を連れてこなかったのかをその女がすこし嫌みを込めていった。書類に文字を書く際に、どうしても枠から外れてしまう。だから物差しを使うがそれでもずれてしまう。正しく書けているかよくわからない。紙の匂いが気になって、文字のことなど頭の中に入ってこない。

座り心地のわるいソファに座ってまっている時間は苦痛以外のなにものでもない。子供向けの本とか今日の新聞などが置いてあるのだろうけれど、自分には読む事ができない。

これから自分がどんなふうになれるのかを想像することしか、考える事もない。ただただ不快な匂いとソファに座り続けた自分のぬくもりが暑苦しくて、さらに潮風を感じる音楽が一層、不安にさせた。

「楡さん、どうぞ」

とさきほどの受付の女がスリッパをぱたぱたさせてこちらの近くまで寄って来て、自分の手を引いた。生暖かいその手は細く、髪から強烈なシャンプーの匂いをまき散らしていた。

女はある程度歩いたところで立ち止まり、すこし言葉をさがしてから「ベッドみたいな椅子がここにありますから、ここにすわってください」という。

じぶんは手すりを確認してから座る。車のシートのような感触である。手すりは新幹線の席みたいな材質だ。周りの壁は白いのだろう。待ち合い室よりも明るいような気がした。背中がぞくぞくする。

「では、ゆっくり、この椅子がうしろに倒れますから気をつけてください」と女が言うと、おそろしいほど唐突に背中ごと後ろに倒れていった。どこまでも倒れて、逆立ちでもさせられているのではないかと錯覚したが、水平よりもやや高めだということに、冷静になって気がつく。

「先生がくるまで待っててくださいね」

と、今度はこの変な状態のまま待たされる事になった。頭は冷静になっているものの、心拍数は平常を保てない。深呼吸をしてみても、おさまらないのだ。薬品の匂いに敏感なので、これほ

ど嫌な予感がすることもないだろう。いろんな匂いがまざっている。

その時突如頭上から耳をつんざくような轟音が響いた。金属が高速で回転している、ひどく高い音だ。それに何かを吸い込んでいるのか吐き出しているのかよくわからないが、液体をどうにかしている音も同時に聞こえてくる。なにかが削られている。たぶん、ほんの短い間だったはずだが、とてつもなく長く感じる。あの音は何だ。あれが自分にも……？ 頭の中のなにかがぬけていく感覚があった。すうっとそれはどこかへ飛んでいき、自分がほんのすこし軽くなるような、そんな感覚。しかし、てすりを握るその手には力が一層こもり、震えが止まらない。

——これが歯医者なのか。噂に聞いていたけれど。

恐ろしいところだと思った。まるで拷問ではないか。はりつけにされて、口を無理矢理あけ、金属で歯を強引に削り取る。こんなものにお金を払っているなんて信じられない。

また、スリッパの音が聞こえて来た。いよいよなのか。

「楡さん、朝よ。ほら、朝よ」

——あれ？

その女の言葉は、なにかに変だった。シャンプーの匂いがまた立ち籠める。気持ち悪い。

「朝よ！」

また強く、その言葉を繰り返す。自分は、この椅子にはりつけられている。身動きができないのだ。

「起きなさい！」

テガミの声だった。

楡は、夢を見ていたのだ。リアルな夢だった。あんな音がするなんて。

「お母さん、夢を見てたよ」

「そんなことよりも、遅れるわよ！」

テガミは寝ぼける楡に向かって怒鳴りつける。

「今日のはじめての歯医者の日でしょう！」

ゆげじいは毎日くたびれたシャツを新品みたいにぱりっと仕上げる。その熟練した手つきに通行人がしばしば見とれることもある。

ゆげじいの店『マイセルフ』は三十年以上も前からある老舗である。隣に中華料理店があったときもよくテーブルクロスを信じられないほど綺麗に仕上げ、店員を驚かせたものだ。

クリーニングには特別な技術は必要ない。夏はおそろしいほど暑くなり、それに耐えられるだけの忍耐力があれば、たいていの人に勤まる、なんでもない職業である。だが、ひとつ手順を間違えると大やけどをしたり、預かっている服を焦がしたり、脱色してしまったりする。ゆげじいも若いころはスカートのひだを八枚切りの食パンみたいにこまかくしてしまったり、ふかふかのファーがついた高級ドレスをぬれた犬みたいにみじめな姿にしたこともあった。いくつかは弁償して大赤字になったし、ときには怒鳴りつけられて魂が縮み上がったこともある。それでもつづけてきた。同じ失敗を繰り返さないように機械に変更をくわえたり、集中したいときはラジオを切ったりして、工夫している。

店の奥はキッチンになっていて、二階が住居スペースになっている。

トヨはゆげじいと結婚してから、料理を毎日かかさずつくっている。ゆげじいが特別好きなのは、唐揚げだ。なぜだかわからないがトヨがつくる唐揚げはどんな店でたべるそれよりもおいしい。

若い頃、自分たちの服を彼らは他のクリーニング店に出していた。どんな仕上がりなのか調べるためにだ。

シャツを皺をどうやって伸ばしているのか、シミ抜きの調合をどうやっているのか、ゆげじいは自分のシャツを真剣な顔で睨め回して嗅ぎ回す。どこの店がどんな機械をつかっているかを徹底的に調べ上げる。ゆげじいはそういうマーケティングを怠らなかつた。

彼が、顧客を増やすために必要だと思った事は、単純だけでもどこのクリーニング店もやっていないことだった。それはタグを切り取ってから返却する、ということだ。何度かゆげじい自身もタグをつけたままホチキスがチクリとささり痛い目にあったり、うなじのあたりから読みかけの本のしおりみたいにひょっこりタグがあらわれてきたりして恥ずかしい目にあたりした。こんな、ちいさなタグのせいでほんの少し嫌な目にあう。それが苛立たしい。しかもこのタグは頑丈な紙でできており、手でちぎろうと思ってもうまく切れない場合がある。そこでまた苛立つわけである。タグはクリーニング店の都合で付けるのだから、外すのもクリーニング店がやるべきである。ゆげじいはそう考えた。どこの店もそんなことに気を配らなかつた。

*

となりの店がカフェにかわり、流れ星やができて行列になったころのある日のことである。

いつものようにカフェ「星差し指」から預かった、元は白かったテーブルクロスをゆげじいは手に取った。いつかチャメに言った「星座」が今日も出来上がっている。コーヒー座だ。アマー

バのような茶色い銀河が白い宇宙に広がっている。コーヒーのシミはなるべく速くとらないことには、クロスの繊維までも破壊してしまうような強烈な漂白をしなくてはいけなくなる。だから、まずは漂白をいそいでしなさいとチャメにあれほど強く言っておいたのに、この様である。

ゆげじいはため息を吐くと、胃の中になにか違和感を覚えた。キリキリと痛むのである。それに吐き気が急にこみ上げて来た。

激しい咳とともに、ゆげじいは突如、真っ赤な血をテーブルクロスめがけて吐き出した。また、自分の真っ白なシャツも真っ赤に染まった。クロスを持っていた両手をすぐに口元まで運び、それ以上の吐血を防ぐみたいにしていたが、咳こんでバランスを失い、両手はすぐに力をなくしてだらりと垂れた。

彼はしばらく咳をしたままのたうち、右へそれたあと大きく左へ揺り戻そうとして、床にこぼれた自分の血に滑ってそのまま倒れた。

トヨは買い物に出かけていたので、数十分もの間、誰にも気がつかれないまま、ゆげじいは気を失い、真っ赤だった血は空気に触れてコーヒーよりも濃い茶色に変色していた。発見されたときはまだ息をされていて心拍数もあった。

救急車はあろうことかへび坂を通ってきたため、トヨをいらいらさせた。あのおしゃべりなトヨは、救急車からでてきた隊員にほとんど口をきかずに、ただぽつりと「見ればわかるでしょうよ、ええ？」といいながら涙をこぼしていた。

叫び、祈り、叶え、思い。

救急車が到着したのは、倒れたゆげじいが発見されてからすでに十分以上経過していた。人通りの多いところなので人だかりができ、救急隊員はそれを押しのけながら担架を運んだ。トヨも救急車に乗り込んだ。

後部のドアを勢いよく閉めて、すぐに発車した。

隣のカフェ「星差し指」のメンバーはあぜんとしたまま、それを眺めていた。

アントワさんは、トヨと意気投合して仲良くなっていたため、扉があいたままのクリーニング店「マイセルフ」の中に入って、散らかってしまったシャツや血の跡を掃除した。

チャメとサンチョは、目の前のお客さんへの対応を黙々とこなした。注文を聞いたり、料理を出したりする時以外はひとことも声を出さない。

明るくてさわやかなボサノバのBGMだけが異様で、なんだかちぐはぐな様子。

チャメは、お茶の注文を聞いて、日本茶をいれたが、茶柱は立たなかった。

だれも仕事に集中できないので今日は閉店にしよう、とサンチョが決めて、急遽、店を閉めた

。緑のドアを閉めたとき、チャメは涙を流した。一刻も早く、ゆげじいに会いたいと思った。なにか力になれないか、どういう症状なのだろうか、いままでなぜ隠していたのか、そんなことばかりが頭から離れない。考えていくほどに涙が溢れ、チャメは立ってられなくなり、膝を折るようにして、くずれた。おおきな声で泣いた。ぬぐってもぬぐっても、止めどなく、あふれる。あふれてはこぼれ、ぬぐってはあふれ。

皿を洗いながらその様子を見ていたサンチョは、そっと近寄ってチャメの肩に手をかけた。

「心配なのはわかります。わたしだって同じです。今日は、もう帰りましょう」

サンチョは聞こえるか聞こえないか、わからないくらいのちいさな声で、そういった。サンチョも涙をこらえているのだ。

アントワさんはいつのまにか隣の掃除から戻って来ていて、テーブルクロスの上のシミを見つめたまま、呆然と立っていた。

「ねえ」

アントワさんがふっと我に返って、サンチョとチャメにむかっていう。

「自分のおじいちゃんがこんなになっても、わたしたち、泣くかな。哀しい気持ちになるかな」

テーブルクロスの上の星空から目をそらさないアントワさん。歯をくいしばっているが、下あごがふるえていて、うまく声が出ていない。

「こんなに愛されてるんだよ、ゆげじいさん」

ふるえた声のまま、彼女は続けた。

「わたしには……」サンチョがアントワさんの方を向いて、静かに言った。

「わたしの祖父はもういません。祖父が亡くなったとき、残念ながら、それほどの思いはありませんでした」

ずるずるとはなをすする音が聞こえる。チャメだ。はなをすすりながら、ようやく立ち上がられ

るようになり、もう一度目をこすった。目は充血して、顔は青白く、別人のようだ。振り絞るみたいにチャメが、

「祈ろう。ゆげじいのために。ミチルのなかに入って……祈ろう」

と言い、ひとりで頷いた。

「私も祈る！」アントワさんも同じように頷く。

「叶うかな……？」

「叶うわよ！」

そのあと、三人で落ち着くためにお茶を飲んだ。

チャメがいれたお茶は三つとも茶柱がたったのである。

チャメは、鈴虫が好きだ。見方によれば、ゴキブリと見分けがつかないその昆虫は、背中の羽をうまくこすり合わせて、鈴がなるように、音を響かせる。

ゆげじいが入院し、みんなでお祈りをした、あの日からすでに三日経過していた。

どうやって元気をだしていたかをみんながいっせいに忘れてしまったみたいに、カフェはどんよりとしていて、常連客に疑問に思われて質問されたが、全員がはぐらかして答えていた。

アントワさんは、そのなかでダメージがもっともすくなく、しっかりと仕事をこなしていた。アントワさんは「秋に咲くように」とコスモスの種と鉢を買って来て植えた。夏まっさかりのこの時期に植えるとちょうどいいらしい。彼女が毎日水をやり、土に向かって声をかけている。チャメは、水をやっているアントワさんを見て、勝手にどぎまぎしていた。

ミチルをテンがいないときでも、うごかせるように、とテンは説明書をチャメにわたしていた。チャメの直筆で、まるい字がつらつらと並んでいる。操作は非常に簡単だ。電源をいれて、アプリケーションを起動させるだけ。設定で流れ星の頻度や大きさ、しっぽの長さや残像の深さを変更できる。実はカメラが仕込まれており、天井を見上げると顔を認識し、アプリケーションに信号が送られるようになっている。

”ささやかな願い、叶えます”という看板ができたのも最近だ。これもテンが書いた。やはりまるい字だ。

願いが叶ったという人が次第に増えていき、ある程度口コミがされるようになったとき、サンチョのアイデアで壁に星マークを貼付けることになった。いまはちょっとした星空が、カフェの壁にできている。

チャメがカフェから家に帰り、二階の自分の部屋でぼんやりしていると、ときどきテンが声をかけるときがある。部屋からお互いが見えるのだ。

「おーい」

テンが窓をあけてチャメを呼んだ。すこし声を張らなくてはいけない。

チャメも窓を開ける。満面の笑みのテンが、なぜか紙コップを持っていた。一体なんなのだろう。

「どうしたの？」

「あ、これ？ 糸電話！」

「そんなことしなくてもきこえるじゃない」

「でも、叫ばなくていいじゃない！」

そうテンがいうと、紙コップのうちのひとつをチャメに投げつけた。風であらぬ方向へ飛んでいき、危うく気にひっかかりそうになり、何度かやり直して、ようやくチャメが受け取った。しかし、紐の部分が長すぎる。これではだらりと垂れて、音声が伝達できない。

糸を適当な長さに彼女は手際良く切り、ピンと張りつめた紙コップと糸でできた糸電話で、二人は会話をした。

「聞こえる？」テンの声が耳元でささやいていて、鼓動が高鳴る。

「うん」

「じゃあ問題です」

「え？」

「クイズです」

「なにが？」

「いいから！ 電話だと聞こえなくて、糸電話だと聞こえるものってなんだ？」

「糸の音？」

「ああ、たしかに……」

「正解じゃないの？」

「ううん。それも正解だなあとおもって」

「じゃあ、なんて思ってたの？」

「んと、ひみつ！」

楡は学校に行くことをいつのまにかやめてしまった。小学校と中学校は無事卒業したが、それから盲学校に行く進路を選択し、盲学校に通っていたが、夏になる前に、ほとんど出席しなくなった。楡の家族も公認せざるを得ない状況で、楡は学校にいかないかわりに独自に勉強をしていた。点字で書かれた、一般の人からすると暗号みtainな文献を必死に読みあさり、日本語で書かれているものにあきたらず、英語も読めるように勉強していた。勉強すればするほど、文献は興味がないものばかりになっていき、しだいに勉強することもやめてしまった。

かわりに発見したたのしみが、釣りである。楡は盲目のハンデよりも、アドバンテージをいかす方法を必死に考えた。目が見えないかわりに、風が見えた。波も見えた。魚の動きも、糸の動きも、すべてが見えたのである。テガミにそのことを痛感させたのは、金魚すくいのとき、楡は延々と金魚をすくいつづけたので店の人に「もうやめてくれ」と言われたときだった。それからテガミが釣り堀につれていったときも入れ食い状態で、ここでも強制的にやめさせられた。

そして、道具をそろえ、海の釣りにでかけた。テガミは楡の釣りのために自動車の免許をとり、なんとかかへび坂での訓練をし、縦列駐車をマスターして、車庫にバックで入れられるようにハンドルを右に左に切り続けたのである。

夜中に出発し、半島にたどり着いた二人は、先人たちのいる埠頭へと道具をかかえて歩いた。目の前は海で、後ろはすぐに山がそびえている。大きな声を発したらどこまでも聞こえるのではないかというくらい遮蔽物がない。波の音だけが響き渡り、山に反射して増幅しているように思える。テガミはとても怖かった。周りは本当になにもない。こんなところで釣り人に襲われたら、どうしようもない。そんな風に考えた。

楡は、まっすぐに海と対峙して、大きく深呼吸をすると、釣り竿を取り出し、用意をはじめめる。どこにも迷いや恐怖を感じさせない、剣道の選手のような凛とした態度で、着々と準備している。

「あ」

テガミが大きめの声をだした。楡は驚いて「どうしたの!？」とさらに大きな声をだす。山に響いて全部の声が返ってくる。

「流れ星……かな」

テガミはぼそりと言った。

「なんだ、おどかさないでよ」楡は胸を撫で下ろす。

「なんだとはなにさ。でも、気のせいかもしれない。すごく星がたくさんみえるのよ」

「星か……どんなふうに見えるの？」

「まるで、そうね、黒い紙に砂をこぼしたみたいに」

「たくさん？」

「たくさんよ」

「さ、母さんも、釣り、はじめよ」

「そうね」

届けたい、届けたい。

ゆげじいが入院してから、一週間がたった。そのあいだ、面会もできない状態が続いている。クリーニング店の「マイセルフ」は休業していて、いくつかの預かったままの荷物を他のクリーニング業者にまわすという余計な仕事をトヨは引き受けた。シャッターをしめたまま、シャツはこちらの業者、コートはこちら、このタグは誰のもの、代金はいくらで、いつ返却するか、など、客に連絡したり、業者に連絡したり、大忙しだった。それもなんの金にもならない仕事である。

ずっと仕分けをしていて、肩が凝り始めたころ、シャッターをロックする音なのか蹴り上げる音なのか判然としない騒がしい音が突然響いた。なにか声も聞こえてくる。

「うるさいね、こっちから用事はないよ、えー」

とトヨは声を張り上げ、シャッターの音に対抗したが、まだ音が止まない。

「なんなんだよ、まったくもう」

トヨはシャッターまでいくと、声がまた聞こえた。

「チャメです！ 開けてください」

「なんだ、チャメかい。わかった今あけるよ、えー」

トヨは、痛む腰を曲げてシャッターを力任せに持ち上げた。七十代の老婆にシャッターはかなりこたえる。

「あいててて」と腰をおさえて渋い顔をしていると、ふわりとした感触が腰に感じられた。チャメの手である。なんだかよくわからないが、チャメは人に触れるとき、生クリームケーキでもさわるように軽くそっと手を当てるのである。この仕草が何人かの若い女性に好意を持たれるのだが、本人は気がつかない。

「ねえ、トヨさん。ゆげじいのお見舞いについてもいいですか？」

深刻な顔をしてチャメは、トヨの腰をさする。

「意識はないよ」

トヨはきっぱりとこたえる。

「かまいません」

「そうかい。あたしゃ仕事があるからいけないし、ちょうどいい。もって行ってほしいものがあるんだよ」

「はい。持っていきます」

トヨは腰をおさえたまま一端部屋の奥に消えた。狭い部屋を見渡せば、シャツやズボンや書類でごった返しになっている。これをあのばあちゃんが処理しているのかと思うとチャメは涙がでそうになった。

トヨがもってきたものは、一枚のボロ切れのようなものだった。

「これは？」

チャメが尋ねると、トヨは照れたようにはにかみながら、

「ただのシャツよ」

と言った。

が、その瞬間にチャメには分かった。これはトヨとゆげじいの記念すべきシャツなのだ。どんな記念かまではわからない。プロポーズするときにつかったシャツなのか、店をはじめて最初にクリーニングしたシャツなのか、別の記念日に渡したか渡されたかしたシャツなのか、それはわからないが、とにかく、二人にとって特別なものなのだ。チャメにとっては、ただのシャツどころではなく、ボロ切れにさえ見えてしまうものだが、二人が連れ添ったおよそ五十年にわたる長い年月を経てもなお、二人を分つことなく存在する奇跡のシャツなのである。

と思ったが本当にただのシャツだったらいやなので、感動的なエピソードを想像するのはやめにした。

「届けるよ。トヨさん」

チャメはまたトヨの腰にふわりと手をあてて、ささやかな誓いをたてた。

楡は竿から糸を垂らして、じっと待っていた。テガミも横に座って待っている。このあたりは、いきなり深くなっていて、魚が集まりやすいようで、釣り人たちも夜中にもかかわらず、数名いた。

ときおり強い風が吹いて、肩をすくめる親子二人。パイプ椅子。

楡はふと、テガミに尋ねた。

「どうして、母さんも釣りしようとおもったの？」

楡の質問にテガミは、予想だにしていなかったようで、びくりと椅子を動かした。

「そうねえ」

すこしかんがえごとをするみたいに黙り込んで、テガミは言った。

「あんにて星空を見せたかったからだよ」

そういうと、二人の間に沈黙が訪れた。この種の沈黙は、とても重苦しく感じられる。波の音や風の音が大きく鳴っている。うるさいくらいに音が響いている。

「え、でもぼくには……見えない」

楡は黙り込んだ。楡には、自分がどこにいるのかさえわからない。前にあるのは山なのか、海なのか。本当に自分は釣りをしているのだろうか。ただ竿を何も無い場所にたらしめているだけなのではないだろうか。

いや、そうではない。

たしかに感じられる潮風に乗って、海特有の生臭い匂いを感じる。後ろから降りてくる空気には、湿っていない山の木々の呼吸が感じられる。足下にはすこし荒れている波の音やしぶき。感触でも海を感じずにはいられない。竿が波にあわせて上下していて、そこから水面でなにが起きているかが楡にはわかる。

そして。

普段都会にいればまず見る事ができないほどの満点の星を、楡はずっと感じていた。もしかすると、目の見える人よりもリアルに、ありありとそこにあることが分かった。流れ星がもし流れたとしたら、誰よりも先に気がつくかもしれないくらいに。

「見える。……見えるよ」

楡は言った。声が震えていたが、テガミは気がつかないように、

「そうでしょ。あなたには、星空を見るための目が備わっているのよ」

「星空を見るための目？」

「ええそうよ。視力がない分、あなたはいろんなものの純粋な形がみえるのよ。星空だけではないわ。あらゆるものよ。世の中のすべてが、純粋な形であなたの中に迫ってくる、それを受け入れる能力があるのよ」

「そう……なの？」

「受け入れられる人は一握りなのよ。こうしてほっ」

そのとき、テガミが置いていた竿が自分の意思でもあるかのようにするすると海に向かって進

んでいった。気配を感じて楡はすぐに竿をつかむ。

「かかったよ、母さん！」

楡は叫ぶ。

テガミは慌てて立ち上がり、楡に場所を譲った。なにがなんだかわからないようで、両手を肩の上まであげてオロオロしている。

「魚の名前はわからないけど、大きいよ」

竿を持ち、リールを少しずつ引き上げる。魚がこちらへ来たタイミングで巻き上げないと力が足りない。竿を肋骨の付け根のあたりに固定して、右手でぐるぐるとリールを巻く。

「タモ！ タモの用意を！」

「え、えっと、タモって何？」

「網だよ網！」

「そんなの、ないよ！」

「じゃあ、隣の人に借りて！」

楡はいつになく強気にテガミに言った。こういうときだけ妙に男らしい。テガミは感心しながらも、隣で釣りをしている人に尋ねた。当然、二人の会話はすべて聞かれていて、なんの問題もなくタモを借りて、いよいよ魚をあげる。

「いい、母さん、落ち着いて。魚は動きがはやいから。でもこっちにむかってくる瞬間もあるし、まっていたらチャンスはある。だから落ち着いて」

そう楡が諭したが、テガミは鼻息を荒くしていっこうに落ち着く気配がない。

魚はなんだか暴れたあと、きれいにタモへ入って来て、すぐに揚げることができた。

「で、これなんて魚？」

「さあ」

ゆげじいは、意識を取り戻さないまま、ベッドに横たわっていた。一応、安定しているらしく、口から呼吸器をつけ、鼻には管が通っている。呼吸器の透明なプラスチックが曇り、それが晴れないあいだにまた白く曇る。白いシーツと白い布団、白い部屋。ほとんどのものが白い。

チャメは、部屋に入り、変わり果てた姿のゆげじいに、そっと近づいた。青白い顔と皺やシミだらけの腕を眺めながら、涙があふれてきた。

トヨから預かったシャツを鞆から丁寧に取り出して、じっと眺めてみる。チャメにはそれがどういうものなのか、わからない。

視線をあげると、心電図の機械が動いていることに気がついた。定期的に音が流れている。子供の頃テレビでみたあの画面から少しもかわっていない。技術が発展しても、このオシロスコープのようなものに、それほど変化は見られない。黒い画面に緑色で、心拍数が表示されている。

自分の心臓に手をあててみる。脈が、血液が流れる音が、聞こえる。

チャメは、手に持っているシャツをゆげじいの胸元に置いた。

受付でそれを、ゆげじいのためにおいていってもいいか、と許可をもらおうとしたら、「衛生上よろしくないものは、お受けできません」と言われた。「ゆげじいはクリーニングやさんなんです、これが不衛生なわけがないではありませんか」とチャメは押し切ろうとしたが、まったくもって相手にされず、最終的に、すこしだけ部屋に置くのはかまわないが、持ってかえるようにということで、チャメは納得せざるを得なかった。

彼がしばらく呆然としていると、後ろで扉が開く音がした。

「テン！」

チャメは振り向いて、テンがいることを認めると、抱きしめた。

突然のできごとにテンは言葉がでない。

「ねえ、どうにかならないの？ テン」震えた声でチャメがいう。「願い事、したんだよ。ゆげじいが元気になりますようにって。またクリーニングしてもらえますようにって。それって、ささやかなことじゃないの？ ぼくの生活のささやかな幸せじゃないの？ どうして叶わないんだよ！ ねえ、なんで？ なんでこんな……こんな姿に！」

テンは、取り乱すチャメを見上げて、いくつか瞬きを繰り返した。

「あのね、チャメ」

できるだけ静かな声で、できるだけ落ち着いて、テンは言葉を選びながら言った。

「残酷かもしれないけど、ミチルに願いを叶える力はないの。あれは、ただの機械で、ガラスの画面に星に見える電気信号を流しているだけなの。それに何を願おうとも、ミチルには関係ないんだよ」

「うそだっ！」チャメは歯を食いしばって、ぎゅっと目を閉じ、テンから顔をそらして壁の方を向いた。

「だったらなんで……だったら、なんでみんなの願い事が叶うんだよ！」

「ささやかな願いごとだからだよ。ねえ、神様が願い事叶えてくれるとでもおもってるの？ プ

ログラミングと電気信号で神様に送信してフィードバックをもらえとでも？」

「わけのわからないことを！」

「落ち着いてよ」

「落ち着いてなんかいられるかよ！」腕を振り回して、壁を殴りつける。

「ゆげじいのこと、わたしだって大事よ。もうその時点でささやかじゃないじゃない。私たちにとってゆげじいはなくてはならない人なんだよ。だから、だからこそ、どうすることもできないんだよ」

「でも、大事な人を守るのがぼくたちにできることじゃないか」

チャメはそこまでいうと泣き崩れた。しゃがみ込んで、両手で顔を覆って、犬がさみしいときにあげるような声をときどき出しながら、ずっと、動かなかった。

ゆげじいの鼓動が、信号になって、聞こえてくる。緑色の波に乗って。数字に変換されて。暗い闇の中を頼りなげな細い線は一瞬でその形を変える。

チャメにとって、ゆげじいは、太陽のようだった。

土砂降りだった人生に光を与えてくれた人だった。

身長の高くないチャメにとって、まるで背が高くなったみたいな気分させてくれた。

――ゆげじいが大好きだ。やさしくしてくれてありがとう。

――微笑んでくれて、ありがとう。本当に大好きだよ。

しゃがみ込んでいるチャメを見て、テンも少し涙をながしながら、いつまでも、曇りつづける呼吸器と電子音を聞き続けた。

コスモスが咲いた。

ゆげじい亡くなってから、すでにひと月たった。

ゆげじいは癌だったようだ。発見が遅れ、救急車で運ばれたときには時既に遅く、いつ死んでもおかしくないという状況だった。

クリーニング屋「マイセルフ」は店をたたんで、すっかりなにもしゃべらなくなったトヨが、毎日ゆげじいの仏壇に線香をあげていた。

「お父さん、もうすぐいくからね」

子供ができてからというもの、ずっと互いに「お父さん」と「お母さん」と呼び合ったまま、いまもその習慣が続いている。

こんなときに子供は何をしているのか、などと彼女はぼんやりと考えるが、すっかり音信不通で、よくわからないのである。娘はブラジルの片隅で暮らしているらしい。向こうは春なのだろう。そして今は夜に違いない。すべてがあべこべで、なにもかもが関係のない存在みたいに、思えた。

トヨのささやかな願いは、「ゆげじいのそばへ」である。

「星差し指」の名物である「流れ星や」は街ですっかり人気になり、一種のパワースポットのように扱われ始めた。この街に訪れた際は、ちょっと願い事をしてから帰ろう。そんなふうにして、流れ星やは街になくはならない存在にまでなってしまったのである。

アントワさんは、コスモスに水をやりながら、道行く人々を見るとはなしに見ていた。

いろんな人がいる。それぞれがそれぞれの目的をもって歩いている。当たり前なのだが、よく考えると不思議に思えてくるものだ。女の子同士が大きな声で話している。スーツの男性が無表情に歩いている。小さな子供が母親に甘えている。無口なカップルが何も言わず手をとりあっている。電話をしている。立ち止まってメモをとっている。わらっている。おこっている。かなしい。うれしい。たのしい。どうしようもない。くるしい。きもちわるい。ういういしい。

コスモスをみていると、花の色も一色ではないことに気がつく。薄紅色のもの、白いもの、ピンク色。花が咲くまで、どんないろになるかわからない。

平日の午後の微妙な空き時間も、流れ星やが有名になり、ほとんどなくなってしまった。絶えず客足があって、席のほとんどがうまっている。

楡が常連客になり、母のテガミと一緒にではなく、最近はひとりで来るようになった。チャメとときどき釣りの話で盛り上がり、アントワさんの優しい声に、楡はたくさんの想像を頭の中に巡らせた。

なにごともなかったかのように時間は過ぎていく。トヨ以外の誰も、ゆげじいのことを話題にださない。

アントワさんはコスモスに水をやり終わると、またカフェの中へ。

「アントワさん、コスモスの花言葉ってなんでしたか？」

サンチョが客に質問されたようで、声を張り上げた。

アントワさんはひざをちょこんと曲げて、お姫様がスカートを持って挨拶するみたいに首をか
しげながら、言った。

「乙女の純情です」

テンはこのところ考え事をしていて、ぼんやりしていた、と言い換えてもいいかもしれない。歌も機械もまったく興味がうせてしまい、ひたすらに考え事をしていて。ひどい日は、ベッドからでなくて、考え事という名のふて寝を一日中やっていることさえあった。

そんなときに、ふと思いついた。

トヨを元気にしよう。

どうにか、長生きしてもらうために、なにか出来る事はないか。

そんなことばかり考えていたせい、とつぜん思いついたのだ。

テンは必要な材料をおもちゃで買くと、夜中まで待って、作業をはじめた。

明るく朝、テンはトヨを呼び出した。ほとんど夜明けだ。まだ通勤の時間でもない。

「どうしたってんだいえー？」トヨはいつもの調子でテンに言った。

「毎日線香ばかりあげてたらつまらないでしょう」自信満々でテンは言った。

どんな前衛的な芸術作品よりも、どんなコンピュータのすごいプログラミングも越えられそうな、そんな思いつきだ、とテンは思っていた。

「最近ねえ、足が痛くてね」とトヨはちょっと及び腰になる。

それでもテンは「マイセルフ」の軒先から連れ出して、駅前までへび坂をのんびりのぼっていった。トヨは左足をややひきずるように歩いている。もしかするとこんな程度の坂道でもつらいのかもしれない。普段街へでるときは、杖のかわりの車を押しながら歩くようになってしまった。はっきりいって、登りはいいが、下りは勢いをおさえるのに大変すぎてななめにちょっとずつ進んで、またななめに進んで、とジグザグに歩くものだから道行く人の邪魔でしょうがない。それでもトヨを昔から知っている人たちがときどき手を貸して、いっしょに坂を下る光景を目にする事もあった。テンはもちろん、帰りはいまよりもっとゆっくり帰る事になると、想像した。

駅前までたどりつくのと、夜明けの明るさがすでに朝になり、ちらほらと人が見えはじめた。

駅前は地下に鉄道の駅が移動してから、放置自転車の数が近隣の都市のなかで一番になった。おびただしい数の自転車がそこに、半分すててあるような状態でたたずんでいる。

「お、おええ！」

トヨは、突然の光景に目を見開いた。放置自転車のすさまじい数が原色で彩られているのだ。最初はなにがなんだかわからなかったが、次第に目が慣れて来て、状況が理解できたトヨは、

「これ、ぜんぶアンタがやったんかい？」と尋ねる。

「そうだよ」当然であるかのように何気なくテンはこたえる。

自転車一台一台に、風船がとりつけられていた。

赤。青。黄。紫。緑。橙。白。

それぞれの色があちこちで膨らんでいる。まるで地球が、この自転車の風船によって宇宙に浮かんでいるかのような、そんな光景。すごい数だ。

「トヨばあちゃん、よくみててよ」

テンはポケットからなにかスイッチのようなものを取り出した。トヨもそれに注目する。

「風船。全部飛ばすから」

スイッチを押すと、ふわり、といっせいに風船たちが、空をめざして飛んでいった。

道行く人たちもみな揃って首をあげて、風船を見ていた。歓声があがった。みんながうがいか目薬でもするみたいに、ぽかんと口をあけて上を向いている。

「放置自転車だって役に立つときもあるんだよ」

テンはトヨにいうと、しばらく風船をながめて、トヨの手を引いた。

「さ。はやくかえらないと、警察とかがみてたら何言われるかわからない」

トヨはなかなかその場所から動こうとしなかった。

ずっと、ちいさくちいさくなるさまざまな色の風船を、そんなによくもない視力で見つめ続けていた。

広げる、書く、丸める。

ゆげじい、こんにちは、いやそっちの世界は朝も昼も夜も関係ないか、どんな挨拶がいいんだろう。

どうも。ぐらいがいいのかな。

遠くまでいっちゃったんだね。こうやってお手紙を書くのも久しぶりで、自分がどんな文字を書いたんだっか忘れちゃってるこのごろです。

ゆげじいがそっちにいつてから、トヨばあちゃんの元気がすっかりなくなってたんだけど、テンといっしょに出かけた日を境にとっても元気になってね、年金を使い果たさんばかりにいろいろと買い物とかお出かけとかで忙しいみたい。ほんと、女の人って極端だね。

それはそうと、トヨばあちゃんから預かって、あの日、届けにいったのに結局持って帰ったあの白いシャツ、実はぼくがもっているんです。なんかね、トヨばあちゃんに返すのもなんか、できなくて。あのシャツさ、タグのところにすごいことが書いてあったね。ゆげじいってロマンチックなことするんだね。これはぼくとゆげじいだけの秘密にしておくことにするよ。

ぼくはこれから、ちょっと外国にいこうかなとおもっています。店長のサンチョには言ってあって、でもトヨばあちゃんとかテンには言いにくくて。

どこの国がいいかな。料理とかお茶の技術が認められて、ちゃんとしたところで働いてみたいな。あ、いまのカフェが不満なんじゃなくって、また戻ってきたいんだけど、いったん、外の世界が知りたくて。そういうのもいいよね。

テンはね、また音楽の活動をはじめたい。緑色の帽子をまたかぶって、ストリートからはじめるみたいだよ。あの子って、なんでもすぐ実行しちゃうから、ほんと、うらやましいや。

たぶん、そっちにはたくさんの風船が届いてるんじゃないかな。

途中でばらばらになっちゃったかもしれないけど、ぼくもテンを手伝って、夜中に自転車にくくりつけたんだよ。あんなに大変だとおもわなかったよ。ボタンひとつであがるのかどうかみたいな実験もしてたし、なんなんだろうあのボタン。テンって科学的なようで、なんかときどき信じられないくらいずぼらなことをやるんだよね。結局ちゃんと説明してもらえなかったんだよ。

まあ、そんなことよりも。

ゆげじいがそっちにいつてしまって、ぼくはすごく悲しんでいたんだけど、いまはそれほどもなくなりました。願い事してみんなでお祈りみたいに祈ったけど、叶わなくて、ほんと、なんなんだろうって怒った事もあったし、いろいろ大変だったけど、たくさん考えてわかった。

ぼくは自分が幸せになろうって勝手に思った。ゆげじいのことを考える前に自分のことばかり考えてた。ぼくのささやかな幸せを守ることに気をとられてたんだ。

あんなに苦しんでいたゆげじいになんか元気になってほしくて、無理させてたんじゃないか、って思えて来たんだよ。ゆげじいは、もう、おつかれさま、ってだれかに言ってほしかったんだよ。それなのにぼくたちは、まだいけるって、無理させてたのかなって。

けどね、いまやっとふっきれて、ゆげじいがそっちにいったこともちゃんと意味があるんだって思えるようになってきたんだ。ゆげじいありがとうね。

この手紙はね、実は、このあと丸めて捨てるんだ。出さない手紙なんだよ。出さなくても届く手紙。

届いてるよね。ぼく言葉。

たくさんの願い事

ミチルにこめられた願いは、それこそ星の数ほどある。ささやかな願いやそうでないもの、突拍子もなさそうなもの、壮大なもの、意味不明なもの、願い事ではないもの。

そのうちの一部をここで紹介しておこう。

- 『にんじんが食べられるようになりますように』
- 『おつかいがひとりでいけますように』
- 『かんじがかけますように』
- 『ヨシユキと結婚できますように』
- 『また健康で過ごせますように』
- 『プリンがたべたい』
- 『みんなの願いがかないますように』
- 『外国と仲良くできますように』
- 『運動会に出る』
- 『海賊王になれますように』
- 『でんぐりがえしができるようになれますように』
- 『最近化粧のノリがよくなって、改善できますように』
- 『友達がたくさんできますように』
- 『いつか犬が飼えますように』
- 『ゆげじいが元気になりますように』
- 『アイドルのモモちゃんと知り合えますように』
- 『塾で成績が一番になれるように努力しますので力添えをお願いします』
- 『攻撃と防御をちゃんとできるように』
- 『梅雨にはちゃんと雨がふりますように』
- 『お母さんの料理がおいしくなりますように』
- 『ぼくの財布が見つかりますように』
- 『目がよくなりますように』
- 『カツラだとばれませんように』
- 『人類が平和でありますように』
- 『生乾きの匂いがなくなりますように』
- 『ゲームをクリアできますように』
- 『プロ野球選手になれますように』
- 『年収1000万以上の男と結婚できますように』
- 『織姫と彦星が出会えますように』
- 『願い事を思いつきますように』
- 『鉛筆の芯はHBより2Hの方が好き』

『黒い服でも目立ちますように』
『世の中の酢豚からパイナップルがなくなりますように』
『弟と仲なおりでできますように』
『手術が成功しますように』
『明日は遅刻しないように』
『契約がとれますように』
『俺の笑いのセンスよあがれ！』
『健康ブームが下火になりますように』
『眼鏡がこの世からなくなりませんように』
『告白してもしフラれてもヘコみませんように』
『落とし穴をつくります』
『神様最高！』
『ときどき笑えますように』
『世界のすべてが二次元になりますように』
『副大統領がってるあのことをウソだと誰かが言えますように』
『音楽の時間がたのしかったので、数学もたのしくなってほしい』
『五十音がいろはに変わりますように』
『女性の地位があがりますように』
『課長のセクハラがなくなりますように』
『ミチルが願いを叶えてくれますように』
『盆栽の棚を綺麗につくれるように』
『ため息をつきたくない』
『人間不信がなおりますように』
『天気予報があたりますように』
『パンチパーマみたいになったお母さんがはやく自分で変だと気がつきますように』
『みんなちょっとずつ幸せになれますように』

伝えると伝わる

アントワさんはチャメがフランスへ行ってしまってから、「星差し指」の厨房にも出入りするようになった。コーヒーメーカーにさえ触った事がなかったが、やりかたを覚え、しゅーっ、という音とゆげを出しながら、慎重にコーヒーを出している。

なぜだが、おなじコーヒーメーカーをつかっておなじように作業をしているのに、サンチョがつくったほうが断然おいしい。アントワさんはこれに感銘をうけて、日々特訓していた。

アントワさんの自宅にはたくさんの花がある。季節の移り変わりにあわせてそれぞれが邪魔しないように咲く。水をやる彼女の姿は、誰がみてもうっとりするほど美しく、彼女自身が花であるかのようだった。

店の常連である楡と急接近したのは、ある日の夜のことだ。

二人ともがお互いをなんとなく意識していたようで、なにもいわなくても伝わっている空気のようなものが彼女らのあいだで共有されていたが、そのとき、突如言葉となって現れた。

楡が晩ご飯をこのカフェですませるために訪れた。

クリームシチューが似合う季節になりつつあった。ブロッコリーの緑、ニンジンのオレンジ、クリーム对白。どこかの国旗の色のような。星差し指でもだされることになった。ビーフシチューもある。

その日は、満月にほどちかい、十三日目の月の夜。ほぼまん丸な月がでている。

「チャメさんは元気にしてるんでしょうかね」

楡は言葉を探しながら、まずそう言った。

「ええ。元気でしょう」とアントワさん。

「コーヒーはうまくつくれるようになりましたか」

「ええ」

「では食後にお願いします」

「はい、かしこまりました」

会話が續かない。店員とお客という立場から逃れられずに二人ともが迷っている。他の客にもそのもどかしさが伝わって、そわそわしている。

「あの」「あの」

二人が同時に、おなじ言葉をいう。そして「そちらからどうぞ」と二人揃って言う。

しばらく譲り合って、楡が一言。

「今宵は月が綺麗ですね」

他の客たちは首を傾げて楡の言葉を反芻する。

「一月が綺麗？ どういう意味だろう。」

でも、アントワさんには理解できた。これは楡からの精一杯の愛の告白にちがいない、と確信した。

「はい！」

と突然アントワさんは大きな声で返事をして、自分で驚いて両手で口を抑えた。右腕に抱えていたトレイが落ちてまた大きな音がする。アントワさんは顔を真っ赤にして、そそくさと厨房へ帰っていった。

厨房ではサンチョが笑顔で待っていた。シチューの鍋をかき回しながら、アントワさんに向けてつぶやく。

「夏目漱石ですか。彼も粋な事をしますね」

周囲の客は誰も理解できないまま、楡とアントワさんの二人の気持ちは通じ合った。

まっすぐ

この街には公園がひどく少ない。あったとしても、とてもちいさな、薄汚れた公衆トイレ付きの雑草が生え放題で遊具は錆で使い物にならず、到底近寄りたがたい公園しかない。駅の改修工事が終わってからガード下にあった公衆トイレも取り壊され、駅から近いところは清潔になったが、その分ちいさな公園がより近寄りたがたいところになってしまっている。

楡とアントワさんは公園を求めて、電車で少し遠くまで出る事にした。電車に乗る事も楡には一苦労だ。切符だって見えないから買う事ができない。金額のボタンがよくわからないのだ。全画面がタッチセンサーの券売機になってしまい、不便さが増して駅でもたつくことも多い。

緑色が目印の電車に乗って、大きな公園について二人は、晴れた日の草原にごろんとねそべった。すぐそばで草の匂いがする。

「最近、コーヒーおいしくなったね」
楡が寝転ぶなり、大きくため息をついた。

「そうかな」

アントワさんは何気なくいったつもりだったが声がちょっと震えていた。嘘を言っていることは楡にはすぐわかる。どんなにちいさな変化だってキャッチする。

「一時期すごいくやしがつたじゃない。店長と同じ分量でおなじようにコーヒーいれてるのにどうしてこんなに違うんだって」

「ああ。うん」アントワさんはそっけなく答える。「気がついたのよ」

「何に？」

「所作がちがった。よく見てたら、ぜんぜんちがったの。信じられないくらい」

仰向けになっていたアントワさんは、楡の方をむくために東南アジアの大仏みたいな寝転び方をした。今日は頭のとっぺんに髪のおだんごをつくっているのでもよりいっそう大仏らしさをかもしだしている。

楡はちいさく頷きながら周囲の音も聞いていた。子供や大人、遊んでいる人だけでなく犬やラジコン、ボールなんかもあることが分かる。

「なんかね」アントワさんは続ける。「コーヒーに対してまっすぐなの」

「まっすぐ？」

「そう。茶道とかを窮めたひとみたいに、ひとつひとつの動作に隙がないっていうか、機械とか豆とかお湯とか、ぜんぶに対して姿勢を正して、綺麗なんだ」

「定規ではかったみたいに？」

アントワさんは笑った。

「全体をやると分かるんだけど、物事には中心があって、それを見極めて、さらに自分の中心とを適度な距離とかタイミングで接するときにはちばん小さなエネルギーで物事をこなせるのよ。サンチョさんにはその美しさを感じるの」

サッカーボールが転がってくる音がする。アスファルトほど跳ね返らないのですぐにころころと転がり、やがてすぐに止まる。

「なんだか大げさな話だなあ」

「そうかな。たとえばね、お湯を注ぐときにね、ポットの傾きをいつも一定にするために肘を左手で持って右手で注ぐの。この左手の固定がないと傾きを意識する事もブレを防ぐこともできないのよ。こういう細かいけれどとてもだいじなことの連続で、コーヒーのおいしさが変わってくるの。わたしは安定してなかった。適当にしてるわけじゃないけど、ちょっとしたことを知らない間に無視していたのよ」

誰か子供らしい足音が聞こえてきて、ボールを手でつかんでから遠くへ蹴った。靴のあたりどころがよくなかったらしい鈍い音が聞こえて来て、痛そうだったが、子供は声をあげずにボールの方へ掛けていった。

「いいことに気がついたね」

「楡くんにもわかるでしょ」

「うん。そうになると、いろんなものが見えてくる魔法にかかったみたいな時間がしばらくつづくよね」

「そうなの！ お花にお水をあげるのだからさうだし、お皿をカウンターから下げるのだからさうで、所作の美しさが、いろんなもののいちばんいいところを引き出してくれるような気がしたの」

「だからおいしくなったんだ」

「ありがとう」

広い空の下で、しばらく二人は寝転がっていた。

こんな考えを思考の迷路と捉えてもいいし、可能性の実験と考えてもいいだろう。

テンはあたらしいことをやろうと考えた。
そうだ、詩人になろう。
詩人になれば、言葉と世界が自分に迫ってくる。
言語化できることとできないことの間、詩があって、その小さな溝のような世界にすべてがある。
どんなことでも詩と言葉とそれ以外の世界で構成されている、と思った瞬間から自分は詩人だ。
発表する場所がなくとも、脚光をあびなくとも。
誰でも今日から詩人になれる。
世界は美しいか。それとも醜いか。
そんなことを考えてもいい。

雲が移動するのはなぜか。
気象学的な見解以外にも、詩的な見方があるはずだ。
雲は旅人である。
そんなことを考えてもいい。

雨が云うと書いて雲だ。
雨のことを伝えている存在である。
旅人はどこへでも旅に出る。
そこがどこであろうとも。
雲も同じだ。
空があれば、どこであろうと出現することも消失することもできる。
集団で風に吹かれるまま、出かけることもある。
大きく膨れて、乳製品を冷やして巻いたような形状にだってなれる。
旅をすれば、さまざまな人にあう。そこから生まれる歌だって、詩だってある。
なにもないところからはなにも生まれぬ、という人もいるが、なにもなくたって生まれることだってある。
母は空虚だ。
存在しない、存在を超越した存在が母なのである。
では父は誰か。
そんなことを考えてもいい。

父は風である。
風に孕まれた空虚が生んだものが、詩であり歌である。
こんにちは、わたしのお父さんは風、お母さんは空虚です。
詩人はそんな躍動と静寂とを先祖に持つ。
だから自由である。
世界は美しくて醜い。
地球は丸くて平。
こんな考えを思考の迷路と捉えてもいいし、可能性の実験と考えてもいいだろう。
どっちにだって転がる。
傾いてもいないのに。
詩人はなにもないところで転ぶのだ。
そこには風があり空虚がある。
父がいて母がいるのである。
転べ。
そして発見するがよい。
世界と言葉のあいだの溝を。
溝から流れるのはなんだっていい。
流れなくたっていい。
そこに地球を転がしたら、傾いてもいないのに転がっていくだろう。
そんなことを考えてもいい。

アントワさんは、最近元気がないテンを自宅に誘って、晩ご飯を一緒にたべることにした。

彼女の家は駅の工事に伴ってできた新築マンションの7階で、窓からは富士山が見えた。

パスタをいい塩加減で茹でて、きのこタマネギとベーコンを小さく切って醤油で炒めたものに少しバターをのせたソースをあえた。チキンのトマトソース煮もあるし、スープもおいしい。アントワさんの料理はとてもおいしいのだ。アントワさんはワイン、そして彼女が作ったジンジャーエールをテンは飲んだ。テーブルを囲んで料理がたくさん並んでいる。

「ねえ、どうしたの？ なにか落ち込んでいるように見えるんだけど」

ワイングラスをくいと傾けて飲んだあと、アントワさんは聞いた。

「落ち込んでないよ」

「そーお？ なんか最近あんまりしゃべんないし」

「詩人になってたんだよ」

「え？ なに？」

「詩人。ずっともぐってたの」

「潜ってたって、いったいどこに？」

「言葉の海に」

「まあ……。なんだか本当に詩人みたいだね」

アントワさんは若干、なんのことかわからず、ぼかんと口をあけたが、口を結び、左手でボトルを手にとり、グラスにワインを注いだ。

「ところでさ、ずっと聞きたかったんだけどね」アントワさんはあらたまったように、いちど言葉を飲み込んで瞬きを三回つづけて速くしてからボトルを置いた。「流れ星やさんってどうしてつくろうっておもったのかなあ？」

突然の質問にテンは驚いた。ちょっとドキドキする。

「どうしてだろうなあ。考えたことない」

「そんなことないでしょう。理由はあるはずよ」

「元々は賞をとりたかったんだ」

「へえ？ それは知らなかった」

「うん。本当のことをいうとね。願い事って、簡単にみんないうし、あたりまえみたいに願ってみたりするけど、実際はそこまで叶ってないし、叶ってほしいとも思っていないんじゃないかなあって。だったら本当に叶うような、ちいさい願い事して、それにむかってみんながんばれば叶うようになるってなったらみんな願い事についてちゃんと考えるかなあって思ったの。うーん、なんだかうまくいえない」

テンは首を傾げて、唸った。話がまとまらない。

流れ星に願い事をすれば叶う、と言い始めたのは誰だろう。そしてその願いはいったいどうやって、誰に届いて、どんな理由をもって叶えてくれるのだろうか。叶ったあとはなにかペナルティがあるのだろうか。そうやってわからないことをかんがえて欲しい、というのがテンの願いなの

である。

「わたしはさ、歌もうたうけど、歌詞にも軽々しく、願い続ければ叶う、なんていうことがあるんだよ。すごく便利なフレーズだからみんなつかうんだけどさ。わたしはそれがいやで、使いたくないの。願いはそんな簡単に叶わない。神様はいるかどうか知らないけど、願いがとどくほど近くにいないと思うの」

「そっかあ。なかなか深い話だね。わたしはあんまり願い事って日常的にはしないから、そこまで思うところはないなあ。まあ『明日は晴れだといいな』くらいは思うけど、それは願い事じゃなくて、希望っていうか思い、なだけだし。あ、ねえねえ」アントワさんはぱっと表情を明るくして「テンちゃんはどんな願い事を考えたの？ ひとつくらいあるでしょ？」と聞いた。

「えー、言うの？」テンは恥ずかしそうにはにかんだ。ジンジャーエールを飲む。

「もちろん言ってよ」

「アントワさんは？」

「あたし？ あたしは、そうねー。楡くんの目が見えるようになりますように、って思ったけど、かなりヘビーな願い事よね」

二人は笑った。

「えっとね。誰にも言わないでよ」

「わかってるって」

「チャメが無事にかえってきますように」

南を越える1

カフェ『星差し指』の壁面が次第に叶った願い事で星だらけになってきて、黄色から青に星の色を替えたのである。赤い星と青い星でアントワさんと、意見が分かれたが、サンチョは「恒星には温度があり、赤よりも青の方が高温であるから、青がよい」という科学的な意見を述べ、アントワさんは「フランス語では赤をrouge、青をblueと言うので、赤がいい」と感覚的な意見としてまとめ、最終的に「赤は興奮する色で青は落ち着く色なので、落ち着いてほしいためにこのカフェがあるから、青にしよう」ということになった。

アントワさんのコーヒーの腕は格段にあがり、通も唸らすほどになった。ときどき自称「通」が数名やってきては蘊蓄をかたり、だらだらと居座り、とにかくしゃべる人たちも常連に取り込む事が出来た。

今日は店を閉めて、サンチョとアントワさんは買い物に出かけた。あたらしいメニューをお互いがいくつか考えたからだ。アントワさんの的にはメニューを考えて道具を購入するまでが一番たのしいところだったりする。

二人はカフェの前に集合して、さっそく街をぶらつく。

「こういう買い出しはね、なるべく地元でやることにしているんだよ」とサンチョは言う。

「どうしてですか？」とアントワさん。

「やはり、地元が潤わなければカフェをやってる意味がないからね。みんながお互いを支えながら生きているってことをちゃんと実践していきたいんです」

そんなことを話しながら商店街から外れた都道の方へ出たところにあるアンティークの店をいくつかはしごする。店の雰囲気はどこもすばらしい。

三軒目まではなにも言わずに店を出た。そして、最後の店で、

「あ、これ見てください！　かわいいですよ」とアントワさんは突然叫び出す。

グラスというかコップというか、ガラス製の容器がいくつか並んでいた。とくに変わった様子もなく、ごく普通のコップのように見える。透明で特殊な模様もない。16角形くらいにカットされている。

「お、これは大正ガラスだね」

「大正ガラス？」

「ええ。100年くらい前の技術で、ガラスをまっすぐ加工できなかったから、こんなふうにしこし歪んでいる。非常にレアだと思うよ」

「でも、凄く安いですよ？　500円？」

「お買い得だな、よし買おうか」

二人はそれを5個購入した。

そしていったん店にもどったあと、他にもいくつか購入したものをざっと並べる。新調した鍋や調理器具、皿やテーブルクロス。

それをアントワさんは満足げに眺めた。

サンチョは、腕を組んでテーブルを見おろして、「ぼくが敬愛する小説にね、ひたすらに南を

めざす小説があるんです。指南という言葉に導かれて、南を目指す。ぼくはね、今日、その小説を凌駕しようとおもう」と頷いた。

なんだかわからないが、とにかく宣言なのだ、とアントワさんは受け取った。

「南を越えるんです」

サンチヨはそこで鼻息を漏らして、決意表明したらしい。

「なぜ越えるんですか？」とアントワさんはうながす。

「南を越えると書いて『越南』ベトナムと読む。新メニューに『ベトナムコーヒー』を追加することに決めたんです」

「なんだか語呂がいいですね」

南を越える2（雲になりそこなったものたち）

買い物したものをテーブルの上に並べた、サンチョとアントワさんは、まずベトナムコーヒーを作ろうと、道具を用意した。豆はフレンチローストのものを用意する。

コンデンスミルクはベトナムコーヒーに必須だ。これはイチゴを仕入れたときにたくさん作っていた。長野産の濃いめの牛乳を使う。砂糖はグラニュー糖。牛乳に対して二割くらいの量の砂糖といっしょに耐熱皿に入れて、何度かレンジにかける。五分ほどで切り上げて、取り出して匙で混ぜる。

アントワさんは赤いミトンで耐熱皿を取り出して厨房のカウンターへ置いて、丁寧に匙をまわす。まだ色はそれほど変化がない。牛乳の白い色だ。この作業を何度か繰り返すことで色が褐色に近づき、粘性もあがっていく。とろりとした、甘い香りのコンデンスミルクができる。レンジを使うのは実験のための時間短縮でやっているのであり、本来テーブルに出すものは鍋で茹でるようにするつもりだ。高級な香水みたいな空色の壺にそのコンデンスミルクは詰まっていた。

「雲の素」とチャメが呼んでいたことをアントワさんは思い出す。

「君がやってみなさい」

あまり見せない笑顔をアントワさんに向けて、サンチョは優しく言った。アントワさんは緊張した面持ちで先ほど購入した安物のグラスを水洗いして、一度フィルタとともにお湯で温めてからふたつ並べる。しかし、フィルタがひとつずつしか使えないので、アントワさんは少し困った顔をした。

「待つのもまた味ですよ」とサンチョは一言添え、並べられたグラスは満足げにテーブルに居座る。そのテーブルにある椅子にサンチョも腰掛ける。

雲の素がグラスに注がれる。独特の音がして、雲になりそこなったそれはグラスの底へ沈殿する。

そして左のグラスにフィルタをセットする。ふつうのフィルタはグラスに入れることを前提にしていなくても、このベトナムコーヒー用のものはそれに比べて随分小さく見える。内蓋と外蓋が別れているのも特徴で、豆を煎ったものをドリップを介さずに入れる。そのためコーヒー自体がとても苦く、粉末になった豆が入る。これは十九世紀のフランスのやり方を植民地であるベトナムも使っていて、ベトナムにだけ残った特異な例のようだ。ローストした豆を計量スプーンできっかり一杯入れて内蓋を閉める。そして一度目のお湯を注ぐ。一周、ほんの少しだけ注いでから、しばらく待つ。豆を蒸らし、蓋が少しだけ上昇する。アントワさんはタイミングを見計らう。一瞬でも見逃すと、ただの苦いコーヒーになってしまうし、速すぎると豆がお湯で踊ってしまう。水分を含んだちょうどいい一瞬を見極めること。これがコーヒーをいれるコツなのである。

お湯を右回りに円をかきながらさきほどよりもお湯の出る勢いをちょっとだけあげて注ぐ。すべてに均一にお湯がまわるように且つ、急にお湯がまわって洗濯機状態にならないように細心の注意を払いながら。フィルタの八割くらいまでお湯が入るのを見届けて、外蓋を閉める。

コンデンスミルクの上にコーヒーがぴとぴと落ちてゆく。ゆっくりと時間をかけて。それほど大きくないグラスでも五分ほど待たなければすべて落ちない。最後の方はアクなので、これを

切り上げるタイミングもまた絶妙なふんぎりが必要である。

コーヒーが落ちる間、二人はなにもしゃべらない。

ただじっと待っている。

ぴとぴと。ぽとぽと。

コンデンスミルクよりもコーヒーのほうが軽いのでほとんど混ざることなく、綺麗なモノクロができあがる。コーヒーがある程度たまってくると、たしかにぽとぽとという音が聞こえだす。雲になりそこなったものに降り注ぐ雨のようで、心地よい。

なににも言わずに、アントワさんは頷くと、蓋とフィルタを持ち上げて、すっと上下を反転させる。

これでコーヒーの完成だ。

「そうだ、いいものがある」

サンチョは思いだしたように立ち上がると冷蔵庫からジャスマンティーを取り出した。

「これはね、ベトナムではコーヒーを飲んだ後のグラスに注いで飲むんですよ」

へえ、とアントワさんは気のない返事をした。サンチョが一口目を飲むのを待っているのだ。

上半分以上がコーヒー、下にコンデンスミルクが沈殿しているので、混ぜて飲む人もいればそのまま飲む人もいる。サンチョはグラスの正面に座って、香りをかいでから、そのまま一口飲んだ。

「うん」

頷く。サンチョは普段かなり厳しい指導をする人なので、頷くことはあまりない。もしかすると今日は機嫌がいいのかもしれない。

「とても苦い」

褒め言葉なのかけなし言葉なのか判別がつかないそれにアントワさんはぐっと身を乗り出す。

「あの、それは……？」

「大丈夫。これくらいの苦さがちょうどいいんだ。ベトナムではcà phê sữa（表示できるだろうか？）と呼んでいる。カフェ・スラ。苦いコーヒーという意味だ」

アントワさんはほっと胸を撫で下ろす。

サンチョはコーヒーを混ぜて、少しずつ飲んだ。

「では、君のぶんもいれてあげよう」

といってサンチョは立ち上がり、お湯を湧かし直した。

「このコーヒーがどうしてフレンチローストを使うか、わかったでしょう。フランスの技術だったんだよ。もともとコーヒーはアフリカの部族の名前から採られているように、アフリカの飲み物だったんだ。当時は泥水なんて揶揄されて好ましくない飲み物だと言われていた。アメリカ人、つまりイギリスやオランダからわたっていったゲルマン人がこれを薄くして飲みやすくしたんだ。ぼくはそんなもの、好きじゃない。コーヒーってのは苦いものじゃなければ意味がない」

サンチョが三角定規みたいに尖った意見を言う。

いいながら、フィルタにお湯を注いで待った。

「さあ、できた」

サンチョの合図でアントワさんは、グラスをじっくり眺めていたが、一口、飲んだ。

「……とても苦い」

二人は笑った。

コンデンスミルクの部分を混ぜて飲むとキャラメルのような味がする。とても苦くてとても甘い。この対極にある味がいいのだ。日本料理にはこんな発想はないだろう。

コーヒーを飲み終わったあと、グラスに氷をいれて、ジャスミンティーを注いで、飲んだ。

今後のカフェをどうするかという話やチャメはどうしているのだろう、といった話をしながら

。

こんな日もあってもいいね、などと笑いながら。

——少しだけ疲れたな。

がらがらと荷物を引っ張って、茶柱名人であるチャメは、自宅へと帰って来た。

「ただいま」と声を出す、だれもいない。

自分の部屋に荷物を置いて、ベッドに倒れ込む。

——そうだ、この匂い。ぼくの匂いだ。

旅行から帰ってくると実感する、自分の匂い。ヘンな匂いというわけでもないが、こんな匂いをしていただけなのか、と少し驚く。大きく手を広げ、仰向けになって天井を見つめる。チャメはすぐに眠りに落ちた。

まだ肌寒い春先で、布団をかけずに眠ってしまったが、すぐに目が覚めた。

インターホンが鳴っている。

——誰だろう。こんなときに。うるさいな。頭が痛い。

無理矢理起きて玄関に立つ。シルエットで分かった。

「チャメ！ 帰って来たの?!」

そこにいたのはテンだった。目があうと、テンは思い切りチャメに抱きついた。突然のことでチャメは頭が余計に痛くなる。

「ちょ、ちょっと」

チャメはそれだけというのが精一杯、というふうにあとはうめき声をあげた。

「どうして連絡もよこさないで、どこでなにしてたのよ！」

テンは泣きながら叫んだ。チャメは次第に目が覚めて来て、状況を認識する。

——そうか、これはもしかして、ちょっといいシーンなのか。

二人はドアの前で抱き合ったまま、しばらく会話を続けた。

「ごめん」

「ごめんじゃないよ！ 本当に心配したんだから！」

「うん」

「でも」

「うん」

「元気そうでよかった」

「うん。大丈夫だよ」

「……ねえ」

「なに？」

「もう少し、このままでいい？」

「……いいよ」

フランスでいろいろあったことをチャメはあれこれとたくさん話した。英語が通じないこと、電車に乗り遅れたこと、コンビニがないこと、目の前でスリを見たこと、おいしいたべものこと、観光地のこと。

テンは、変わり続ける街のことを話した。ヘビ坂に大きなビルが出来るので夕暮れがちゃんと見られなくなること、個人経営の飲食店がまたひとつなくなり大手チェーンの牛丼店に変わってしまうこと、商店街独自のスタンプがなくなること、小さな映画館ができること。

二人の話はつきないが、なにせチャメはひどく疲れていたのだから、眠る事にした。

翌朝、チャメは少し早起きして、「星差し指」へ出勤した。

仕事の内容はちゃんと覚えているか自分で心配だったが、調味料の場所とか冷蔵庫の中の配置などはサンチョがきっちり決めたのがちゃんと守られていたため、昨日一日だけ休んだだけかのように自然に仕事に戻ることができた。

夕方、すこし早めに仕事を切り上げた彼は、着替えを済まして、すぐとなりの旧クリーニング屋の扉のチャイムを押した。

「はーい」

と少し怒っているかのような不機嫌でしわがれた声が聞こえて来た。チャメは懐かしくなって泣きそうになるが、こらえる。

チャメの姿を見て、かわらない坊主姿の彼を最初、思いだす努力をしていたが、数秒じっととまった後、「ああ、芝刈り機みたいな坊主」とトヨばあさんは言った。

「ちょっとゆげじいに報告したいんです、いいですか？」

「いいよ、好きにしな」

少し合わない間にトヨの性格が変わってしまったのだろうか、とチャメは心配になったが、口に出さず黙っていた。

家の中をのぞき、台所を通過して、茶の間へ。ちいさな丸いちゃぶ台と畳の部屋だ。いまだにブラウン管のテレビが置いてあるが、すでに映らないはずだ。なにもかもが三十年くらい前から時間がとまってしまっているかのような空間だった。チャメはとても寂しい気持ちになった。人生をあきらめてしまった人のなんともいえない小さな絶望が積み重なった部屋のように思えたのである。

そこにゆげじいの仏壇があった。黒塗りのそれには乾きかけた団子が供えてある。ゆげじいの遺影は天井に近い、壁の高いところに飾ってあった。しんじられないくらい明るい笑顔でこちらを向いている。

線香をつけて、鐘を鳴らし、手を合わせて。目をとじ、すこしうつむき加減で。

「帰って来たよ」とちいさくつぶやき、あとは心のなかで声を出す。

外国にいったわかったよ。ぼくには夢があるって。ぼくはサンチョさんの店で働いて、みんなをちょっとずつ幸せにできたらいいんだ。で、お金をためて、いつかぼくもサンチョさんみたいに店を開いて、ぼくみたいなガキを雇って修行してもらおうんだ。この夢はやっぱり譲れない。叶えるためにがんばるよ。

いいだろ？ ミスターマイセルフ。

お正月を迎え、テンは実家へ一度かえることにした。

電車で遠くまででかけるのは久しぶりかもしれない。ほとんど引きこもり状態だったわけで、体がなまっていたし、切符の買い方もちょっとわすれそうになっていた。

電車に乗っている間にずっと考え事をしていた。

自分はこれからどうしようか。どうやって暮らしていこうか。いますすめているプロジェクトをどうやって形にするか。歌も歌いたい。絵も描きたい。やりたいことがたくさんある。やりたいことを全部やっていたら人生がいくつあったって足りない。どれかにしぼってしまうと飽きてしまったときにやるせなくなってしまう。かといって思いついたときにどれも手をだしていたら、結局どれも手つかずに終わってしまいそうだ。本も読みたい。ゲームもやりたい。親も大事にしたい。チャメともっと仲良くなりしたい。次から次へと欲望が溢れ出た。これは欲望なのだろうか。誰かに関わりたい、話を聞いてみたい、そういうことは欲と呼べるのだろうか。よくわからない。

あれこれと考える間に、テンは眠ってしまった。

電車は北へと進んでいく。都会の狭い風景から解放され、田んぼと電柱が規則正しく通り過ぎていく。

目的の駅につく手前でテンは目が覚めた。とても明るい。なぜこれほど明るいのか最初はわからなかったが、雪が積もったあと、晴れた空がそれを反射してあかるくなっているのだった。北国の雪景色は、やわらかい光に照らされ、テンの目をほそめさせた。雪はやんでいて風もなく、とても静かだ。

駅を降りて、商店街を通り抜ける。どの店もシャッターが閉じられていて、寂れている。しんと静まり返った町に、テンはとても淋しい気持ちになった。道路は申し訳程度に雪かきされている。ショッピングセンターができてからというもの、この通りは寂れる商店街の見本みたいに、だれも彼もが年老いて、ひたすらに、人が寄り付かない通りになってしまった。

実家に帰る前に、寄っておきたいところがあった。

八幡宮の神社だ。この地方では有数の大きなものらしい。さすがにこちらは初詣の人でにぎわっていた。

——今年は何年だっけ？

そんなことを思いながら、テンは、お参りに並ぶ大勢の人の最後列に、同じようにしてならんだ。

子供の頃は、親と一緒に来たこの神社。気のせいかな、わずかに小さく見えてしまう。自分が大きくなったということだろう。それに、あの商店街の淋しさと、一人で来てしまった淋しさが一緒になって余計にそんな気持ちにさせているのかもしれない。

また長時間、何をするでもない時間が訪れてしまった。並んでいるだけだと、なにもすることがない。

ぼんやりと、流れ星やさんのことを考えた。

これから、続けていくべきだろうか。ある程度おもしろい実験だったなとは思いますが、なにか物足りない。自分が本当にやりたいことってなんだろう。私の願い事は何なのだろう？

——そうだ、お参りすることを考えなくっちゃ。

流れ星やと神社のお祈りを一緒にできてしまう、いかにも日本人っぽい自分にテンは少し吹き出しそうになった。いまテンは八幡宮にいるのだ。そういえば、神社に願い事をするのは何故なのだろうか。きっとほとんどの人は縁起をかつぎたいだけで、とくにそれほど願いが叶う事なんてどちらでもいいようなところがあるのではないだろうか。願う事は安全、繁盛、合格。自分か他人か、家族か商売か、でだいたいのは語られる。安全だったかどうかなんて、一年どれだけ振り返ってもよくわからない。大人になれば怪我はあまりしなくなるし、商売だってうまくいかないのは神様のせいではない。合格にしたって、結局は自分の努力と他人の実力や、その偏差で判定されるだけなのだから、神様が入り込む余地はない。

テンの願い事は、あれこれ考えるうちに決まった。簡単なことだ。とくに迷うほどのことではない。

やたら順番をまたされ、一応用意した五円玉を放り投げると、鐘をごろごろと鳴らし、手を合わせて、目を閉じた。

テンは心のなかでつぶやく。

「流れ星の神様と、喧嘩しないでください」

チャメの家。冬の続き。

「狐が犬を飛び越える話、知ってる？」

テンが突然チャメに言う。

「さあ」

チャメはそっけない。

「すばしっこい茶色の狐がのろまな犬を飛び越えるんだよ」

「へえ」

「英語で言ってみて」

「ん？ 英語？」

「ねえ！ 聞ってる？ 英語で言ってみて？」

テンはチャメの肩を揺らしながら、なにかよくわからないことを繰り返す。

「すばしっこいは……quick? brown fox jump のろまな dog……単語がでてこないなあ」

「おお！ いい線いってるよ」

「だから何？」

「秘密！」

「また？」

「いろは歌って知ってる？」

「ぼくの話聞ってる？」

「ねえ！ 知ってる？」

テンの元気に押され気味なチャメである。

「うん。色は匂えど散りぬるを……でしょ？」

「そう！ その英語版がさっきの狐のやつ」

「え、でもOが3回でてくるよ？」

「英語だと難しいみたい」

「あそう」

「ねえ、興味ないの？」

「ない」

「ねえ！！」

「うるさいなあ」

「いろは歌もいろいろあるんだよ？」

「そう。どこで知ったの？」

「え？」

「あれ？ どこだっけ？」

チャメは吹き出した。

「知ってるよ、多分それって」チャメは揺すられた肩をおさえながら「文字のテストに使われる

んだ」

「あ、そうだ！ うん」

「でもぼくのパソコンは宮沢賢治だよ」

「そうなの？」

「うん」

「宮沢賢治の何？」

「イーハトーボとかモーリオ市とかがでてくるやつ」

「あそう」

「聞ってる？」

「負けたくないもん」

「誰に？」

「チャメに！」

「べつに勝負してないよ。ていうか、なんか性格最近変わったね？」

「そんなことないよ」

「そうかな」

「うん。あ、そうそう、思いだした。あのね」

「何？」

「鞆にこっそり入れたでしょ？」

「な、なんのことよ」

テンは顔をいきなり真っ赤にした。笑ってしまうくらい、図に描いた星のようだ。

「あの、掃除機からでてきた言葉のうちのひとつ、入れたでしょ？」

「ど、ど、どうしてわかったのよ」

「フランスから帰るときに、空港で検問にひっかかって、鞆の中を全部出さなきゃいけなくなっ
てね。そのとき出て来たんだよ」

「あの鞆、旅行にもっていったの？」

「うん。手荷物用にね」

「ちょっと取ってこようか」

「いいよ！持ってこなくて！」

「わかった。でも、答えを言ってないからさあ」

「あ……うん」

急にテンは正座して、面と向かって、でもうつむきながら答えを待っている。

「そうだな……しりとりにしようか」

「え？ しりとり？」

「そう。いまからいうからね」

ごくりとつばを飲む音がテンの喉から響き渡る。テンの手を取ってふわりと大きな手で包み込
むチャメ。

ひと呼吸置いてから言った。

「すき」

テンは黙って、目を閉じた。

チャメは「き」で始まる、その続きを声には出さずに。

目を閉じて。

ほんの一瞬。

触れた。

トタン屋根で四方ぐるりを囲んだツタだらけの、一見ヒッピー的なものに見える、流れ星やは、春が来て、故障した。雨風に耐えきれなかった配線がショートしてしまったのだった。テンにしてみれば、それくらいの故障はたいしたことではなかったが、これを機会に、ミチルを休ませることにした。

カフェ「星差し指」に貼られた星の数も数えてみる事にした。3,249件。すごい数だ。叶わなかった願い事もあるだろう。でも、この数の星を目の前にして、ちょっとばかりではあるが世の中が明るく、ささやかだけど幸せな世界があることを、カフェのメンバーは実感した。

後日談がいくつかある。

トヨは、あの歳で、南米の娘夫婦のところへ向かったようだ。たぶん、そのままあちらで人生を終えるのだろう。

アントワさんは、週末にフランス語講座をひらくことにしたみたいだ。資格も必要らしいので勉強しているところ。

楡は、魚釣りに目覚めて、できるかぎり色々なところに出かけることにしている。一度だけ釣り専門誌に「盲目の釣り人」として掲載されたみたいだ。

テガミは、この話では地味な登場しかしていないが、星差し指のコーヒーが永久無料の権利をもっている。今日も洗濯物は美しいに違いない。

サンチョは相変わらず、一分も狂わず目をさまし、驚異的な正確さで料理を出す。ときどきたばこを吸うがまた値上げしたのでやめようかどうか迷っている。

チャメは星差し指で働いている。数年たったら独立して、自分の店を持つという目標をたてた。

テンはまた歌を始めた。歌うべき言葉がたくさん見つかったのだそうだ。

*

願い事、十回言ったら、叶う。口に十と書いて叶う。

テンは自分の名前の由来をひょんなことから知った。

もう一回言ったら？ 吐く？

なんてことを考える。

自分の部屋からチャメの部屋が見える。

今日はめずらしく洗濯物が干してある。しかもひとつだけ。

ボロ切れのような、もとは白かったであろう布。

——ゆげじいはチャメの心の中にいるからね。

その言葉に答えるように、春風に乗って、くたびれた布はひらひらと空を泳いだ。

あとがきのようなもの

最後までよんでくれたみなさま、ありがとうございます。

紆余曲折、プロット通りに書けない歯痒さを実感しながらも、とにかく終わることができて、ひとまず安心しています。おおきな修正点もいくつかありますが、それは年明けにしたいとおもいます。

この物語は、ぼくが夢で見た、不思議な流れ星ハウスを小説にしたらどうなるだろうという実験的な気持ちと現代が抱える大小の問題をちょっとだけとりあげながら展開する小説です。最初は願いを叶える人たちのちいさな変化を捉える、ほんわかした物語にするつもりでしたが、どちらかという運営の側にたった視点で語られる話になってしまいました。

随所に小さいたずらをしかけています。

ネタバレですが、ぼくは作者なので、いろいろここで書きます。むしろここを読んでから読み返すと「あの不可解は台詞はそういうことだったのか」と理解できると思います。

1章 5 「コリタス草はいい香り」

コリタス草というのはマリファナのこらしいです。これはThe Eaglesのいわずと知れた名曲「Hotel California」の歌詞から採用したものです。ゆげじいがいたホテルの名前のことをほのめかしています。

2章 5 「冬は友達のはじまり」

Winter , Spring Summer Fallという歌詞があるのはCalore Kingの「You've Got a Friend」です。楡とチャメが友達になればいいかなあと思って。そのテーマソングっぽく。結局釣りにいくのも母になってしまって、いろいろ計画がくずれましたが・・・。

3章 7 「花言葉」

Mr.Childrenの歌で同名のものがあります。

どちらかという失恋の歌なので、やっぱり楡が物語をぐりぐりと作者という神様に反抗しているみたいです。

4章 5、6 「南を越える」

吉田篤弘の小説「圏外へ」という小説は、マッサージ師に指南されて、南を目指すという話があるのですが、サンチョがっている小説がそのことです。

4章 7 「いつの日もこの胸に」

これもミスチルです。Innocent Worldをモチーフに書きました。

この小説では上記のようにいろんなものを取りあげて、それをモチーフにする手法を使ってみ

ました。うまくいってないところも多々見受けられますが、これから腕をあげていきたいところ
です。

最後になりますが、ここでお礼を言いたい人が何人もいます。

まずはいしいさん。途中迄をいったん印刷して製本したものをあげたところ大変よろこんで
いただいて、ぼくのモチベーションになりました。

本カフェの人たち。本を読む人たちがあつまるところなのに自作小説を載せていました。でも
いろんな人がコメントをくれて、読んでいますとか面白かったとか、腕が上がっているとか、い
ろいろ褒めてもらってすごくうれしくて、この文章を書いている間にも泣いてしまいそうです。
とくにペテンさん、レビさん、味の素さん、ジーナさん、フウガさんには感謝の言葉もつきま
せん。ありがとうございました。

ひよんなことからぼくの作品を読んでいただいたゆきねさん。ありがとうございました。

小説を書いているんです、と伝えたら、読みます、って言ってくれたT君、ありがとう。

ポッドキャスト「世界一周たびたびニュース」のやすやすさんにも紹介していただきました。
お礼をこちらでも述べさせていただきます。ありがとうございました。

そしてPaper & Coのみなさま。システムをあまり理解しないまま利用していましたが、不具合
もなく、快適に本のアップロードができました。ほんとうにありがとうございます。

この小説を、なにも知らずにダウンロードして読んでくれた人。それだけでうれしいです。で
きたら「読んだ」っていう短い感想だけでもいいのでなにかください。でも、なにもいわなくて
もうれしいです。ありがとうございます。

そして最後に、tewoさん。すっかりやりとりはすくなくなっていたけれど、tewoさんのことを考え
ながらこの小説をつくりました。ものすごく迷惑なことかもしれないけど、ぼくの精一杯の感謝
の気持ちです。いつもありがとうございます。